



348
218



始



348-218

尾上八郎著

日本文學新史

東亞堂發兌

大正
3. 11. 19
丙交

自序

余をして率直に語らしめよ。從來の國文學史の多くは、個々の文學書の解説、もしくはその紹介に過ぎたり。個々の文學者の傳記、またはその逸話に傾きたり。要するに、文學史料の臚列に留まされり。文學史といふもの、恐らくは、かくの如くなるべからず。

極めて大體に於いて云ふ。一時代には、一時代の文學あり。恰も、一個人の生活の如し。その生

活の、内的なると、外的なると等しく、その文學も、また内容と形式とを有す。而して、一個人の内外面の生活の、他人のそれと異なるが如く、一時代の文學の内容と形式とは、また他の時代のそれと同じからず。故に、余は、一個人の生活の両面を研究して、その人を究むるが如く、一時代の文學に就きて、その内容を討覈し、轉じて、その形式に及び、而して、その特殊的光彩を發揮せむと企畫せり。

二たび、極めて大體に於いて云ふ。稱して一時代といふは、思想上の一段落なり。一新思想の興起し、發達し、而して衰頹する一期間なり。恰も、一個人の生涯の如し。その生涯に、幼、壯、老の三段階あると等しく、文學にも、また初、盛、晩の三期存す。而して、一個人の生涯の、必ずしも政治的變動と終始せざるが如く、一時代の思想、また悉く政治的事象と聯關せず。故に、余は、時代の區分を、専ら思想的推移によつてし、特殊

の説明及び政治史との對照の用に供する外は、つとめて、政治的區分に從へる從來の例を排せむと企畫せり。

三たび、極めて大體に於いて云ふ。文學は、たゞ一系なり。思想の推移に從つて、種々に分化し、而して消長すといへども、猶要するに、一系の外に出でず。恰も、一個人の屬する一民族の如し。父祖よりして發し、發展に發展を重ねて、一家は二家となり、三家となり、四家となり、いよ

いよ多きを加ふるに到る。しかも、その間に、幾多の曲折あり、興亡あり、刻々に變化すといへども、大觀すれば一系なり。これを、個々として研究し、調査する、もとより妨げずといへども、その一系の發達、變遷の大綱、及びその起因たる大原動力を逸するに到つては、思はざるの甚だしきものなり。文學の歴史を説くに、文學書を臚列して、その説述を旨とし、文學者の氏名を集録して、その評傳を主とするが如き

は、前者と比して、相距ること遠からざるものなり。細説は易く、概説は難し、余は、その難きを取立て、小註の外、一切文學書の題目を省き、文學者の氏名を掲げず、更に一切の引用をなさず、藁地猛進、大體を捕捉し、一系の發達、變遷の大要を見、而して、その然る所以を討尋せむと企畫せり。

余が以上の企畫は、極めて新しからず。しかも、これを完成せむとして、匆忙の身、幾度か停滯

し、幾回か挫折し、時日を費すこと徒らに多くして、得るところ甚だ少なし。稿を改むること數度にして、更に意に滿つるものなし。然れども、躊躇し、逡巡するは、學徒として愧づべきこととに屬す。故に、こゝに、斷然、不備の稿を擧げて、世に問ふこととせり。

以上の故を以て、余が國文學史には、個々の文學書の解説なし。紹介なし。個々の文學者の傳記なし。逸話なし。加ふるに、特殊の場合の外、時

代の政治的區分なし。看者、或は、その體をなさざるを議せむ。然れども、これらを過ぎて、稍々大なるものあり、恐らくは、これによつて、二千餘年に涉れるわが國民の思想的、生活の一端を、この小冊子中に髣髴するを得むか。

大正三年九月

著者

例言

一、本書は、時代思潮の變遷、及びそれに伴ふ各時代の文學の消長を叙するを主とせり。故に、先づ、各時代の概論をなし、更に、その時代の韻文と、散文とに就きて、各、その内容と、形式との説述をなし、而して最後に、その總括をなさむとせり。この方法に於いて、從來の國文學史の多くと異なれり。

二、本書は、個々の文學書の解説をなさず、一々の文學者の傳記を述べず。これ、また從來の國文學史の多くと、その形を異にせるところなり。故に、初學者は、從來の國文學史に就きて、それらの各に關する準備的智識を養成せらるべし。

三、本書は、時代思潮の變遷を重んずるが故に、各時代の區分は、その一

變轉、一曲折に従へり。これに於いても、また少しく従來の國文學史と異なれり。但し、説明及び對照の用として、處々に、政治的區分を記したれど、主とする處は、それにあらず。

四、本書中、各節後の小註は、議論の空疎に渉るを避けむがために、それに要する主なるものを、摘記したるなり。故に、人名も、書名も、便宜により、雜出せしめたり。従つて、これらは、有名なるすべての文學書の名を含まざるとともに、また記憶すべきすべての文學者の名をも有せず、要は、たゞ本論の傍證をなすにあるのみ。

日本文學新史 目次

序論

個人の價值……時勢の力……國民の特性……率直、單純、快活……特性の保有……外國思想の影響……支那思想……漢文としての利用……漢文の詩趣……自然の謳歌……人生文學と自然文學との轉換……消極的傾向……積極的傾向……印度思想……功德の一面……自然の親昵……中心の移動……感情……佛者の說法……儒道の發揮……時代的價值を有する文學の種類……短歌の價值……純正の國語……國文學の背隨……小説の價值……目的の移動……美……真……道德的中心の移動……公卿道……武士道……平民道……全時代の區劃……情中心時代……法中心時代……道中心時代……主義中心時代

第一章 情中心時代の(上古時代)

日本文學の起源

國文學の萌芽……海と山と……海の文學……神……祝詞……愛……神の文學……愛の文學……前後の二種の契合……内容……想像の廣大……發展的意氣……纖巧優美……取材の纖弱……形式……韻文……譬喻……纖弱と豪宕と……反覆……對句……枕詞……序詞……誇張……形體……三大段……五句の形……一句の音數

第二章 情中心時代の二(奈良朝時代)

概説

外國文明の影響……美術の發達……漢詩文……國民の思想的發達……美術に劣れる文學……神經的、感情的……現代的利益……固有思想の破壊……純日本思想の發揚……當代の三區劃

第一節 韻文

第一期……固有思想の確守……反抗的態度……第二期……外來思想の發現……客觀的態度……第三期……新日本主義

二 形式

第二節 散文

第一期……修飾の發展……譬喻……對句……枕詞……序詞……形體の膨脹……叙述の順序……第二期……平叙的傾向……第三期……修飾の貧弱

第三章 情中心時代の三(平安朝時代)

概説

國民的自覺……最初の黄金時代……當代思想の中心……情の尊重……當代の要求……美の希求……逸樂の風……短歌の盛行……形式的中心……佛法の弘通……宿命説……漢學の趣味……詩文集の受玩……理想的發達……當代の三區劃

第一節 韻文

新韻文……第一期……悲觀的傾向……第二期……取材の一定……推

理的傾向……純客觀的態度の興起……第三期……新舊二派……中間の一派……諸派の渾融

二 形式

第一期……長篇の衰微……中間の切斷……對句、枕詞……譬喩……懸詞……第二期……序詞の進歩……物名……縁語……第三期……懸詞と縁語との重用……譬喩……修飾の適度……秀句

第二節 散文

一 内容

散文の發達……第一期……浪漫的……寫實的……第二期……諸傾向の統一……宿命説……第三期……趣向の廣心……歴史物語の出現……事實の雜載

二 形式

第一期……單調……懸詞……第二期……形體の進歩……譬喩……引喩……對照……第三期……無技巧的描寫……結論

第四章 法中心時代の（鎌倉幕府時代）

概説

感情の抑壓……意志の文學……新文學、舊文學……新佛法……佛法宣傳の文學……漢文と國文との抱合……新日本文學の發生……堂上を下れる文學……全日本の代表……國民文學の發生

第一節 韻文

一 内容

新舊兩文學の連關……古文學の趣味の包括……新舊趣味の統一……感情の極端なる表現……虚偽の型……意志……幽玄の趣致……達磨風……反動によりて生ぜし一派

二 形式

新形式……格調……譬喩……序詞……縁語……懸詞……引喩……古歌の統一

第二節 散文

一 内容

目次

意志の尊重……武士の經典……固有趣味と支那趣味との統一
……新佛法思想……舊散文と新散文との契合

二 形式……………二六

新文體の發生……軍記物語……四六文體……對偶の發達……國文
脈……引喻……引喻の意義……引用の廣汎……單文の利用……佛語
の混入……言語の大統合……散文と韻文との統一……結論

第五章 法中心時代の二室町幕府時代

概説……………二九

新趣味……深奥の詩趣……中心思想……說教的態度……統一的傾
向……補綴的傾向……現代的傾向……亂世的思想……平民的趣味
……當期の三區劃

第一節 韻文……………三三

一 内容……………三三
短歌の失落……統一的傾向の發展……變轉的趣味……兩傾向の
進展……補綴的傾向……幽閑的趣味……非古典趣味……現代的趣

味……佛法思想……經典の功德……現代の利益……極端まで進め
る佛法文學

二 形式……………三三

種類の増加……形式の膨脹……統一的傾向の進展……形式の自
由……生語の使用……現代的傾向の進展……俳諧連歌と狂言と
の一致

第二節 散文……………三五

一 内容……………三五

新趣味の發揮……佛法思想……因果律の説明……非國家的……體
無思想……半俗半僧……幽寂沈鬱……佛法的教訓の低落

二 形式……………三六

統一的傾向……補綴的傾向……對偶……引喻……謠曲との一致……
類文と散文との合致……平安朝模倣の不能……生語……現代的
傾向の熾盛……結論

第六章 道中心時代(江戸幕府時代)

目次

概説

平民の時代……僧侶、隱者の失墜……平民の發展……舊文學と新文學と……貴族文學……平民文學……平民道……義理と人情と……儒道……儒道的教訓……道中心の文學……古典主義……現代主義……自覺的態度……當代の四區劃

第一節 韻文

一 内容

第一期……前代の繼承……教化によれる嚴肅の氣分……平板單調……新時代の活氣……第二期……傳習の破壞……幽玄の境地……鎌倉幕府時代の失敗……宗教的趣味の發揮……時代思想の自由なる發露……歴史劇……社會劇……善と惡との戦闘……時代觀念の缺乏……義理と人情との衝突……情中心時代との相違……個人の價值……第三期……復古の氣運の熾盛……理論よりも趣味の時代……江戸氣質の發揮……客觀的態度……主觀的態度……技巧的傾向……第四期……韻文の衰頹……現代主義と崇古主義との調節……江戸趣味の巧みなる發揮

二 形式

第一期……忠實の繼承……放膽的用語……第二期……生語の眞の使用……形體の縮小……韻文素の多量……時代觀念の缺乏……懸詞、縁語の續出……典型の制定……第三期……古調の模倣……引喻より來る滑稽……平安朝の語句……配合……現代語……古典的傾向の熾盛……第四期……隆盛後の韻文……内容と形式との聲調の一致

第二節 散文

一 内容

第一期……傳習的……第二期……享樂的趣味……寫實的傾向……二様の態度……興味中心……第三期……細緻の寫生……江戸氣質の發現……儒道的精神の發現……第四期……勸懲主義……古典的傾向……中期以後の進歩……支那小説の模倣……理想時代……道德の體現……善の化身……佛法の因果律と宿命説と……統一的傾向……反道德的思想

二 形式

目次

第一期……前代の繼承……第二期……譬句……緊縮の語句……描寫の精粗……變轉的興味……第三期……新古典的形式……懸詞よりする滑稽……寫實的傾向の發展……第四期……形式の膨脹……統一的傾向……街學的口氣……單調の弊……時代觀念の缺乏……結論……平安朝と當代との類似

第七章 主義中心時代(明治時代)

概説

思想の交雜及び代謝……純正の文學……日露戰役前……物質主義……基督教主義……寫實主義……主情的傾向……國粹保存主義……本能満足説……主情的傾向の熾盛……新寫實主義……象徴主義……日露戰役後……自然主義……餘裕派……享樂派……新派主義……創始期……寫實主義全盛期……過渡期……自然主義全盛期

第一節 韻文

一 内容

第一期……第一期前期……時代思潮合致の努力……歐化主義……

擬古的傾向……主情的傾向……寫實的傾向……第一期後期……普遍的趣味……擬古派……主情的傾向の全盛……象徴主義の出現……第二期……現實的傾向の盛……韻文の步調の一致

二 形式

第一期……第一期前期……新形式……七五調……純擬古體……七五調及びその以外の格調……七五調の全盛……第一期後期……用語の廣汎……舊形式の打破……七五調の全盛の繼續……古語の復活……異様の語句……新技巧……第二期……口語體……現代的傾向……結論

第二節 散文

一 内容

第一期……第一期前期……現實主義……政治熱……歐化主義……寫實主義の興起……寫實主義の隆盛……文學の眞價値の認識……寫實主義の衰頹……第一期後期……新寫實主義の勃興……暗黒面の描寫……第二期……自然主義の發展……新派主義

二 形式

第一期……翻譯的口氣……言文一致體の現出……新時代語の勢
 力……新元祿文體の興起……新元祿文體の衰頹……第一期後期
 ……第二期……想と文との合致……結論……總結

目次終

日本文學新史

尾上八郎著

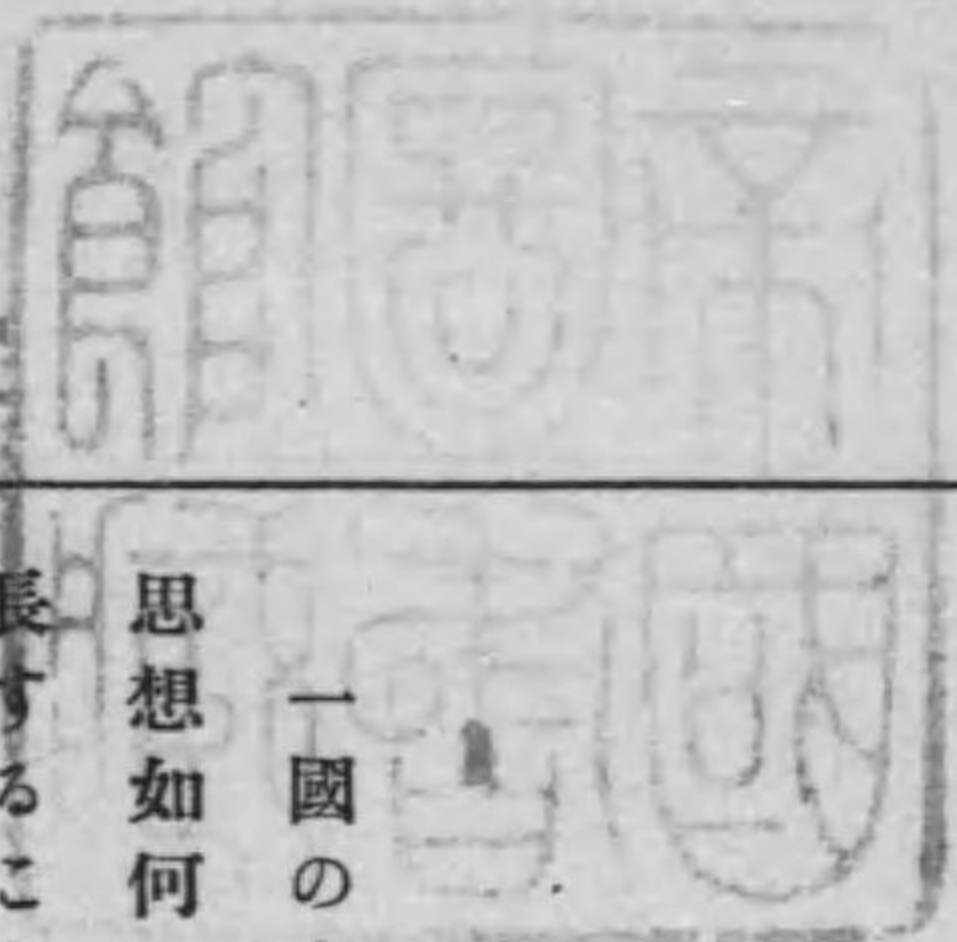
序論

一國の文學が、一國民の特性如何に關し、一時代の文學が、一時代の思想如何に關し、更に、四圍の他國民との交渉如何に關して、發達し、消長すること、水の器に従ひて方圓なるが如きは、學者の定論にして、今更、これに對して、絮説し、反復する必要無かるべし。しかれども、余は、一部の學者が、文學者その人の境遇、位地、思想等を偏重し、推尊して、ただこれのみが、一代の文學に、偉大の影響、感化を與ふるが如きものと

序論

一

個人の價



時勢の力

せるを、訝からざるを得ず。一人唱へて萬人隨ふ。國民の指導者となり、先達者となり、醜惡の境を去つて、善美の國に赴かしむるは、即ちこれあり。これを以て、一大勢力と認め、一大原動力と考へ、特に、それに就いて、多く研究をなし、努力をなすは、固より、當に然るべきものあり。然れども、如何なる人物も、皆時勢の子なり。時勢の母によりて生まれ、その懷によりて養はる。人、各感受の度を異にし、表現の力を一にせずといへども、その生まれ、養はるゝところは一なり。故に、その云ふところ、人を驚かし、世を率ゐるといへども、畢竟、時勢の産物なり、時勢の力によりて産出せられたるものなり。多くの例を擧ぐるまでも無し。時勢を離れて文學無きと同じく、時勢に背きたる詩人無く、作家無し。故に、深く、時勢の如何を察するときは、個人の價値は、大いに減殺すべく、廣く、一時代の文學の如何を考ふるときは、一詩人、

國民の特性

率直、單純、
快活

一作家の勢力は、微弱となるべし。これに對して、多くの價値を認め、これの研究に多くの勢力を費して、他を顧みざるが如きは、失當ならずとせむや。

一國の文學が、一國民の特性に關するは云ふを俟たず。これを根柢として、わが國文學を検するに、頗る茫漠の感なくんばあらず。わが國民の特性として指摘すべきもの、果して如何。これに關して、學者は、更に多くの研鑽と、思考とを費さるべからず。然れども、吾人は、特に、率直、單純、快活を選定せむと欲す。純なる日本人を、吾人は、上古時代に於いて見ることを得。外國の影響無き孤立したる島國の青き山、緑の野に歌唱し、宴樂する大和民族は、常に自己を露すに率直なりき。時に觸れ、事に逢ひて、その考ふる處は單純なりき。しかも、相交はるに談笑歡晤、極めて快活なりき。かくの如きは、蓋しいづれ

の國、いづれの地に於いても、その太古時代の民族として、當然の事なるべく、これを以て、我が國民の特有の如く考ふ可からざるべし。然れども、諸種の部族が、地を争ひ、食を奪ひて、相闘争し、凌轢し、權謀術數の要を見るに到りて、これらの性情は、忽ち跡を收めて、奸譎、犖猛、欺詐、百端の狀を呈すべし。わが日本は、上に聖天子在り、日と輝き、月と照らして、光明十方に遍く、下に、臣民相親睦し、和合せり。時に、紛亂あり、錯誤ありといへども、たゞ、一時の現象に過ぎず。俄然として鎮靜し、倏忽として解決す。結んで解けず、亂れて治まらず、年を互りて、紛糾、錯雜するところなし。渾然なる一大家庭、春風温に、團欒、笑語の座を繞れり。故に、その自然に享くる處は、よく保有せられ、繼承せられて、古猶今の如く、今猶古に似たり。國民の特性は、千古を貫いて、一道の光明、天際より下界に向つて、直下するが如し。往々、一代の思想

混沌たるが如きことありといへども、猶雲の被ひ、霧の遮るが如し。光明は、その間を穿通し、透徹して、毫も、その方向を變ずることあらず。この故に、上古時代に於いて現はれたる歌謠の類は、すべて率直なり。單純なり、快活なり。言はむとするところを述べ、欲するところを歌ふ、考へず、思はず。たゞ、男女相愛の意を述ぶる處に就いて、稍々痛切なるものあるを見るのみ。而して、その間に於いて、元氣の充實せるものありて、興國の意氣を示し、辭藻の巧緻なるものありて、文辭の爛然たるべき豫言をなせり。然れども、かくの如くにしてのみ止まむには、今日の日本文學は、遂に存在すること能はざりしなり。

一國の文學が、四圍の他國民との交渉如何に關するは、又云ふを俟たず。我が國の朝鮮より、支那より、支那朝鮮を経たる印度よりの影響を蒙りたるは、主として上古時代の末に在り、歴史の教ふる處は、應

支那思想

神欽明の朝なりといへども、その以前に於いて、彼れの文物の我れに入るもの、頗る多かりしなり。而して、その中に就いて、最も痛切に、わが國民に影響せしものは、支那思想なり。五常と云ひ、五倫と云ひ、倫理綱常の道の、既に我れの有せるを、秩序的に教へたるは、即ち儒道なり。これによりて、國民の道德は、確實に、その倚るべき處を指示せられたりといへども、これらは、本より、我が有なる者なり、自己の器什を、他人の配列に任せたるに過ぎず、これによりて、特に、道德的に啓發し、進歩せしめられたるものあらず。故に、樂天的なるわが國民は、その教を極めずして、それを記載したる文字を採れり、文章を採れり。すなはち、儒道として採用せずして、漢文として利用せり。文字を以て、自國語を寫し、文章を借りて、自己の思想の發露に供したり。然れども、これらは、寧ろ些末なり。わが國民は、却つて、よく漢文に現はれたる

漢文として
の利用

漢文の詩趣

詩趣を採りたり。儒道の倫理綱常の方面よりも、寧ろ、漢文の趣味の、津々たるを採りたり。漢文は、大陸的文藝にして、雄渾、壯大、加ふるに、沈痛、悲壯の趣に富み、眇たる島國思想のわが國民、殊に、當時の國民の、十分に了解し得ざる處なり。わが云ふところは、かくの如きことにあらず。たゞ、よく、彼れの文學の、自然を謳歌し、自然の純美を讚嘆したるところを享けたるを云ふなり。前に述べたるが如く、上古時代の歌謠は、極めて單純にして、且つ淺薄なりきといへども、猶人間を主題とせり。未だ、四圍の自然を顧る餘裕を有せざりき。然るに、一度、漢詩文の、天地、山川、草木、禽獸を歌へるを見、初めて、自己の周圍を顧望し、その美なるに驚けり。山の青き、水の白き、花木の麗しき、禽獸の愛らしきを見たり。祖先のあるものは、時勢の促す處によりて、先づこれを歌へり。一人歌ひて、和するもの多く、人生文學は、こゝに一變し

自然の謳歌

人生文學と
自然文學との
轉換

て、自然文學となるに到れり。勿論、その間に於いて、人生を願盼するもの、また少なからずといへども、人生は、殆んど自然の添景に過ぎず。全體に於いて、國文學は、自然讚美の文學となり了れり。然れども、漢文に現はれたる自然は、畏敬せられたる自然なり。大陸の風物は、雄大、悲壯にして、事に觸れて慘憺たるどころあり。故に、その文學に現はるゝものは、自づから畏怖の情あり。境に居て、先づ陳ぶるは痛心の事なり。杯を取つて風に臨むも、頻りに悲哀の涙を流す。畢竟するに、消極的傾向を帯びたり。わが國民は、快活なり、樂天的なり。わが風物は、雄大ならず、悲壯ならず、瀟洒愛すべく、親しむべく、玩ぶべし。故に、わが國民は、自然の美を認むれども、悲痛の感を起さず、却つて親昵の情を催す、彼れに於いては、悲しまるゝもの、われに在つては、却つて喜ばるゝ現象を呈す。天外裂帛の聲、彼の國人は、哀音聞くに堪へ

消極的傾向

積極的傾向

すとし、わが國人は、夜を重ねても、猶聞かむことを願ふ。故に、わが國文學は、自然の讚美といへども、積極的傾向を帯びたり。況んや、階級制度儼として存在し、上流者のみ、文藝の光を被るを常とし、しかも、それらの人士が、飽食、緩帶、人世の樂しむべきを知つて、思ふべく、考ふべきものあるを知らざりしに於いてをや。

印度思想

支那思想は、此の如くわが文學に影響せり。然れども、その影響する處は、主として皮相なり、深く骨髓に入り、人心の機微を穿つものにあらず。これあるものは、支那思想に次ぎて、われに入りたる印度思想なり。人生の須臾なる、諸行の無常なる、迷の怖るべく、悟の尊むべく、善因に善果あり、惡因に惡果あり、轉々として車輪の廻るが如きを教へたるは、佛法なり。而して、更に、現世の、溷濁にして厭ふべく、來世の、清淨にして希ふべきを教へたるも、佛法なり。現世の快樂をのみ

功德の一面

知りて、他を知ることなかりしわが國民は、この教の深遠にして解し難きに驚けり。ことに、佛を本體とし、至上の位とせるを以て、我が國體に合せずとして、排斥せり。然れども、これが齎し來りたる諸種の文明の徳は、漸次信仰者の多數を生じ、多くの寺院は建立せられ、僧尼は、年を逐うて増加したり。たゞ、率直にして、單純なるわが國民の多くは、遂に、深くこの教義の存するところを知らず。その功德の一面をのみ信じ、幸福の希求、禍災の排除に於ける祈禱、加持の方法をのみ採用せり。故に、屢々戰亂ありて、死屍縱横なる時に於いて、或は、濁土厭離の念を生じて、簡易なる佛法を信するものありきといへども、猶それよりも、佛の功德によりて、現在に福利あらむことを希へり。故に、佛法は、深く因果の關係を説き、厭世の思想を述べたりといへども、わが國民は、遂に、現世を厭ふことをなさず、常に、此生の長く、一家團

自然の親昵

中心の移動

樂の久しく、自然を親昵する、愈々多からむことを思へり。寺を立つるも、一時の功德のためなり、若しくは、富貴を示さむがためなり。時に、君を捨て、親を捨て、妻子を捨て、山に入り、寺に入るもの少なからずといへども、たゞ、當時の社會的現象に刺激せられたるが爲めのみ、當時の權勢者に不満なりしが爲めのみ、或は、其愛者に別れたる悲痛の深きが爲めのみ。山に入りて自然に接し、經句によりて、自づから慰藉するのみ。何處にありても、濁世を厭ひ去るものにあらざるなり。故に、佛法は、儒道に反して内容的なり、従つて、影響するところ深酷なりきといへども、猶その眞意義を發揮すること能はざりしなり。國民性は、儼として、遂に曲ぐべからず。

然れども、儒道と佛法とが、多大の影響を、國民の思想に及ぼし、更に、國文學に及ぼせるは事實なり。上古時代より平安朝時代を終るま

感情

佛者の説法

儒道の發揮

時代の價値を有する文學の種類

で、國文學はその主とするところ感情にあり。感情以外に於いては、殆んど何物もあらず。在るものは、たゞその添景に過ぎず。然るに、鎌倉幕府時代に到れば、その情態は一變して、佛法の思想は充實し、瀾漫し、一代の文學、恰も佛者の説法の如し。室町幕府時代に到るも、猶然り。轉じて、江戸幕府時代に至れば、中心とする處は、儒道にあり。一代の趨勢亦一變して、あるところの文學、辭章、殆んど全く、儒道の思想によつて支配せらる。その貴族的なると、平民的なるを問はず、その歸著するところは、大體に於いて、勸善懲惡にあり、支那的道德にあり、儒道の發揮にあり。勿論、この間にありて、わが國民の特性、一縷の光明奕々として射照せりといへども、外來の思想は、雲霧の如く、簇り來つて、一時を蔽塞せずんば止まざらむとせり。述べてこゝに到つて、吾人は、わが國文學に、短歌あるを誇とせずん

短歌の價値

純正の國語

ばあらず。上代以來、單純なる、しかも、わが國民の情趣を述ぶるに不足なき一形式、國民一般に相傳して、今日に到つても、猶益々その盛を加ふ。散文の開放自由、殆んど、些の制裁を加へざるに比しては、儼として一壑城の如く、純粹の國語の外、殆んど、すべての外來語を許さず。思想は言語に伴ふ。外來思想も、わが國語に翻譯せらるゝに到つては、その眞意の大半を亡失して、日本的となれり。故に、短歌に於いては、千載の下、猶故人の聲を聞くが如くなるのみならず、日本國民の特性、躍々として、猶生けるが如きものあり。かくの如きもの、散文に於いては、遂に求むべからず。われに短歌ある、實にわが誇とせざるべからず。然も、平安朝盛時の短歌は、漢詩に比しては、氣局狹少なりといへども、優美、纖麗、一代の典型をなせり。故に、後の文學、その韻文たると、散文たるとを問はず。傾向を異にし、趨勢を一にせざるものと

國文學の春

いへども、多きは、その思想に於いて、少なきは、その辭章に於いて、これを、そのまゝに採用し、或は、彼れと、これとを補綴して、燦爛たる錦繡の美を作り出だせり。故に、各時代、各種の文學、詮じ來れば、悉く短歌の範圍を出でず、少なくとも、短歌の趣味を脱するものなし。この點よりみれば、短歌は、實に、わが文學の骨髓を構成するものと云ふべし。吾人の短歌を尊重する所以、こゝにありて存す。

然れども、かくの如きは、たゞ、明治時代以前の文學に就きてのみ云ふべし。明治維新以後に於いては、乃ち大いに異なり。云ふまでもなく、この時代に於いては、外國と、わが國と、思想的交通非常に頻繁となり、彼れと、我れと、殆んど一家の趣あり。故に、彼れの思潮は、汪然として我れに入り、從來の思想と衝突し、混亂し、波濤の洶湧して、千渦萬渦、盤旋して止まざる狀を呈せり。彼れの自由なる倫理思想は、偏狹

小説の價值

なる儒道主義を破り、清新なる基督教の教義は、陳套なる佛法の思想を斥けて、從來國民の崇拜の中心たりしものをして、殆んど存在せしめざらむとせり。然も、彼れが、多大の歳月を費し、經驗を積んで得たるところのもの、一時に混入せしを以て、その前たるもの後となり、後たるもの前となりて、一層の紛亂を惹起せり。すなはち、寫實主義の、浪漫主義に先だつて行はれ、自然主義の、更にそれに次いで行はれしが如き、これなり。而して、これらの變遷を、最もよく體現せるものは、すでに韻文にあらず、却つて散文に在り、ことに小説に在り。小説一たび起つて、文學といへば、殆んどこれなるかの觀を呈し、その一變遷一轉化は、悉く、時代思潮の一低一昂を現せり。韻文も、またその形態と、内容とを改めて、これに追隨せりと云へども、たゞ、その後塵を拜するのみ、遂に、一世を指揮し、誘導せることあらず。故に、短歌の尊重は、

たゞ明治時代以前に止むべし。以後に到つては、その方針を變改せざるべからず。而して、吾人は、更に小説に向つて、多くの研鑽をなし、正しき評價を加へざるべからず。

然り而して、この短歌の目的、すなはち、わが國文學に貫通せる目的は、美の表現にあり、美の謳歌にあり。支那思想の影響によりて、人生を主とせるもの、變じて、自然を主とするに到りしことは、前に述べたり。爾來幾千百年、わが國文學は、かくの如くして變遷し、發達せり。美を目的とすれば、醜は除却せざるべからず。美を取り、また美を取る、作成せられたるものは、すでに、此の地上のそれにあらず。詩人の想像は、勢、天邊高く上らざるべからず、天上の樂園に憧憬せざるを得ず。故に、文華は、爛然として目を奪ふといへども、眞の人生を去ること、幾何なるかを知らず。この風調は、近年にいたりては一變せり。

目的の移
動
美

泰西最近思潮の影響するところ、自然主義の勃興し來るとともに、眞の希求は、殆んど突如として起れり。事實のまゝに寫す、矚目のまゝに描く、宇宙の眞は、その間にありと云ふ。すでに、美のみを追求せず、醜もまた従つて現はれ來る。故に、その寫すところ、天上のことなる能はず、その描くところ、悉く地上のものなり。美の希求に馴れたる人の眼には、醜怪見るに堪へざるものあり。天上よりしたる地上は、汚穢實に云ふべからざるべし。然れども、これ自然の勢なり。否、むしろ個人の覺醒なり。美の表現の眞の希求に地歩を譲るは、新陳交代の理、まさに然るべきものあるべし。そは暫く措く、少なくとも文學歴史を検するものは、わが國文學の立脚するところ、近年に於いて、全然一變せるものあるを知らざるべからず。支那思想によりて、自然の美に著目すべく教へられたる國民は、泰西思想によりて、また人

生の眞に注意すべく、教へられたるものあるを曉らざるべからず。然らずんば、遂に今日の文學の如何なるかを解すること能はざるべし。畢竟國文學はその殆んど創始より、明治の末年(四十前年)に到るまでと、その以後(四十後年)とを以て、二大限界を定むることを得べし。乃ち前者は、美を追求する文學にして、後者は、眞を希求する文學なり。

更に考ふるに、感情を中心とせる時代に於いて發達し、完備したるものは、公卿道なり。典雅、優麗はその特徴にして、守舊、退嬰はその缺點なり。佛法を中心とし、更にまた、儒道を中心とせる時代に於いて、整頓し、完備せるは、武士道なり。勇敢、果斷はその特徴にして、粗野、豪放はその缺點なり。而して、前者の感情を中心とせるに對して、後者は、意志を骨髓とす。感情の命するところに従つて行動するは、前者にして、意志の動くまゝに進退するは、後者なり。更に、この後者の發

道徳的中
心の移動

武士道

平民道

達せる下にあつて、多大の抑壓の間に興起せるものに、平民道あり、否むしろ町人道あり。その中心とするところ、また感情に在つて、意志にあらず。これ、公卿道と、その規を一にするものなりといへども、その間に横たはれる著しき利害の念は、遂に同一なるを許さず。故に、進取の氣に富み、堅實の風あれども、高雅の致なく、優美の趣を缺けり。これによつて、同じく美を對境とせる文學に於いて、又この二大別あるを見る。明治時代に到つては、文學は、既に、佛法、または儒道に煩はされず。たゞ、感情の完全なる發露を以て、理想とし、極致とす。この點に於いては、また平安朝、及びその以前の時代と同轍なり。故に、王政維新は、また文學の維新と云ふべく、また復古と云ふべし。しかれども、その文學は、泰西の思潮に影響せられて變轉し、作家各、主義あり、理想あり、しかも、舊倒れて新起り、一傾向廢れて、新主張出づ。恰も、戰

全時代の
區劃
情中心時代
法中心時代
道中心時代
主義中心時代

亂の世、幾多の英雄豪傑の、一起一倒するが如し。この時代を指して、たゞ感情の時代と云はむは、あまりに疎雑なり、却つて、これを、主義の時代と云ふに、頗る妥當なるを見る。故に、余は、すでに述べたるところによりて、全日本文學を、時代的に區分して、國初より平安朝時代より、到るまでを、感情中心時代、略して情中心時代とし、鎌倉幕府時代より、室町幕府時代に到るまでを、佛法中心時代、略して法中心時代とし、江戸幕府時代を以て、儒道中心時代、略して道中心時代とし、更に、明治時代を以て、文藝主義中心時代、略して主義中心時代となさむとす。而して、以下これに準據して、各時代の文學の内容と形式との大體を觀察し、その發達、變遷の大綱を討究せむとす。

第一章 情中心時代の一（上古時代）

日本文學の起源

吾人の祖先は、海より來れり。來りて、漸次山間に入りて、梶を棄て、棹を棄て、耒耜を手にし、種子を下して、農業に従事し、波に馴れ、汐に馴れたる勇敢の子は、日出で、耕し、日入つて憩ふ、平和なる農民となり了れり。海によりて初まりたる幾多の神話は、今日猶儼として存し、おのころ島、天の浮橋、鰐、禊等の事、愈々出でて、益々豪快の趣あり。然れども、これらは、次第に山野に關する情話に一變し、香薤、蓴、菱、蜻蛉、雀、馬、猪等の資料、益々多くして、愈々繊細となり、優美となり、而して、後世をして、この範圍を脱出することなからしめたり。況んや、漢學と、

國文學の
萌芽
海と山と

海の文學

神

佛法と共に、この發展的意氣を消磨し盡したるに於いてをや。これによつて、吾人は、~~大~~化以前時代の文學に於いて、明らかに、二種の區別を認むべきなり。一は、豪宕雄快、海より得たる氣力の横溢したるもの、一は、優美纖麗、山野より得たる情趣の發露したるものなり。

自然の威力は絶大なり、迅雷、狂風、暴雨、大水、悉く、人をして畏怖せしめずんば止まず。ことに、海より離れて、山野に入り、農業を本位とする國民に於いてをや。畏怖すれば、直ちに、これを人格化して、崇拜し、尊敬し、ひたすら、その怒に觸れざらむことを希ふ。こゝに於いて、神を生ず。神は上なり。われより優越せる力量あり、技能あるものを指す。

わが國民の族制々度は、由て來るところ久し。家を重んじ、名を重んじ、祖先を敬すること、子々孫々、相繼ぎて止む時なし。時の隔たる

祝詞

に従ひ、その祖先は、人格と、事蹟と、次第に廓大せられて、人間視すべく、あまりに神聖となれり。故に、天地自然の現象の、人格化したるものと共に、神として現はさる。而して、祖先の神、ことに、その中に就いて、功業の顯著なる神は、最も崇拜を價するものとして、自然の人格化したる神とともに、國民の前に現はれ來たる。而して、國民の生殺と、五穀の穰、不穰と、天災、地妖の多少とは、一に、その權内に屬するを以て、國民は、ひたすら、これらの意を損せず、常に、その怒を和げむことを欲し、低頭、平身して、憐憫を乞ひ、以て人生の福利を得むとす。故に、先づ、山野、河海の種々の産物を捧げ、また、當時の文明的設備に於いて、製出し得べき服飾の類を備へ、更に、當時の文學的技能に於いて、成し得べき告白の詞を朗讀す。祝詞は、こゝに於いて成れり。すなはち、わが國文學の萌芽は、一面神によつて成れり、神を對象として成れりしなり。

人は感情の動物なり。生れ出で、乳を乞ひ、而して、母を戀ひ、父を戀ひ、兄弟を戀ひ、姉妹を戀ひ、引いて他人に及び、進んで、他國人にいたる。博愛の教こゝに於いて立ち、四海同胞の語これに由つて起る。而して、この中に就いて、最も激烈なるものを、異性の愛となす。男女相愛の理は、千古を貫いて變ずることなく、文野を通じて誤ることなし。故に、國初より以來、幾多の紛糾も、混亂も、これに由つて生じ來る。生活難の聲は、いまだ聞えず、たゞ、異性相呼ぶ聲を聞く。その情調の高まるや、咨嗟、咏嘆の音、自づから、一種の律格を生じ、遂に、簡單なる歌謠は出で來る。單純なる腦力により、貧弱なる語句を驅使して、千萬無量の意を漏す。苦澁は生じ、難解は起る。上古時代の歌謠の、幾多の學者の議論を経て、猶解せられざるものあるは、たゞに、想と、語との古きのみならず、わが國文學の萌芽は、一面また、愛によつ

て成れるを承認せざるべからず。

國文學は、かく、神と、愛とによりて初まりたり。故に、一の、神嚴なるべく、敬虔なるべく、委曲なるべきは、自然なり。而して、他の、優美なるべく、華麗なるべく、巧緻なるべきは、また自然ならざるべからず。これによりて、こゝに、おのづから神嚴の文學と、優美の文學との二種は生じたり。

然れども、猶稍々深く、この兩者を觀察するに、前者は、その云ふところ、雄快に、絶大に、その譬喩の如き辭藻に於いても、廣大無邊、今日の吾人の想到し能はざるものあり。然るに、後者は、後世に比しては、雄大の趣ありといへども、前者と對しては、餘りに纖弱に、甚だしく巧緻なり。辭藻に現はるゝ事物、動植物の如きも、概ね微小なるものに過ぎず。兩者は、非常に懸絶せり。後世の人、屢々上古時代の歌謠、悉く模

前後の二種の契合

素にして、しかも雄快なるを云ふ。樸素はあり、雄快は未だし。その存するは、たゞ一面に於いてのみ。これによつて見れば、前者は、海より得たる意氣の、消磨し盡くさるときに發生し、後者は、山に馴れ、野に馴れて、温順、和平の氣満ち來りたるきに於いて産出したるものにあらずや。すなはち、前に云へる二種は、こゝに云へる二種と、殆んど全く、契合せるを見るにあらずや。而して、爾來海に離るゝこと久しく、狂瀾、怒濤、たゞ、畏怖、驚嘆の資料となるに到りて、雄快、豪宕、前者の趣致は去つて跡なく、優美、纖麗、後者の興趣は、益々多きを加へたり。

内容

想像の廣大

わが國文學は、かくして始まり、かくして進展せむとするなり。然り而して、前者は、その陳ぶるところ、神に對する祈禱に過ぎずといへども、その含むところ、場處に於いては、當時想像せる全世界なり。時間に於いては、過去より未來に到りて、綿々として盡くるところな

發展的意氣

し。對するところは、全智、全能の神にして、その數、八百萬にいたる。範圍の廣き、時間の長き、對者の多き、かくの如きもの、わが國文學に於いて、たゞ一あり。しかも、當代に於いてのみあり。他に求めて得べからざるものなり。而して、これに用ゐるところの語句、大舟と云ひ、大津邊と云ひ、大海原と云ひ、八鹽路の鹽の八百會と云ふ。悉く、海を親しみ、舟を家としたる時代の、發展的意氣の鬱勃たるものあるを見るなり。

纖巧優美

祝詞に於いては、かくの如し。歌謠に於いては、すなはち如何。男女相思は、事すでに豪宕ならず。そのふところ、何ぞ獨り雄快なるを得むや。艶詞、麗語、相次いで出づる、蓋し、事の自然に屬す。然れども、時いまだ蒙昧に屬し、感情また粗硬を免かれず。情緒の纏綿、後世の如きは、求めて遂に得べからず。しかも、すべてに於いて、纖巧、優美、

これを前者に比して、甚だしき逕庭あり。ことに、後者の用ゐるところのもの、珠と云ひ、櫻と云ひ、蓮花と云ひ、鴛鴦と云ひ、いづれも皆色彩の美はしくして、形體の小なるに於いてをや。海より離れて入りたる山野の氣漸く、粗野を化して文雅とし、疎豪を改めて巧緻としたる、想像するに難からざるにあらずや。勿論、この中に就いて、軍旅の間になれるものありて、興國的意氣の大いに昂れるを示し、前者に比して、異色を呈せりといへども、猶雄快の趣に於いて、祝詞に劣れり。巷衢の間に行はれたる童謠と稱すべきもの、また簡單、樸素、他と類を同じうせずといへども、たゞ異様なる聲調をなせるのみ。意義多くは暢達せずして、殆んど謎語に近し。饗宴の歌も、また稍々和平、諧調の音ありといへども、その眞價値に到つては、遂に戀愛の歌に及ばず。然れども、この間に於いて、疎豪の氣漸く失せて優雅、纖麗の風、時と

もに起り來れるは、最も顯著なる事實なり。

以上は、主として内容に就きて云へり。吾人は、更に、これらの形式の如何を一顧せざるべからず。これらの文學を讀過して、先づ、吾人の耳に快きは、すなはち、言語の、一種の聲調を有せるにあり、比較的嚴格なる形式、いはゆる韻文の形式を取れるにあり。たゞ、神に對するもの、すなはち祝詞は、他と對しては、頗る寛大なる制約を有し、愛を主とするもの、すなはち歌謠は、前者に比しては、一層嚴格なる制約を有せるのみ。いづれの國の文學も、韻文を以て初まる、わが國文學何ぞ獨りこの範圍を脱出するを得むや。

更にまた、これらの文學の、吾人に、技巧的の妙味を感得せしむるものは、譬喩に在り。反覆に在り。枕詞にあり。序詞に在り。而して、殆んど、これらに通ずる誇張にあり。白妙の衣、美しき男子を、白玉の

譬喩

玲瓏たるに比し、盛年の女子の嬋娟たるを、池中の蓮花の灼々たるに比し、絶大なる神力によりて、罪惡の刻々に滅び行くを、天風の雲霧を掃ふに比し、大船の纜を解きて大海に流れ行くに比し、利刀を以て、盤根、錯節を刈除するに比する等、或は優美に、或は壯嚴に、その單純なる原意を修飾して、皆潑々として生氣あらしむるにあらずや。而して、これらの資料を見るに、その原意の優美なると、豪宕なるとよりして、自づから纖細に、或は雄大なるものありといへども、全體に於いて、歌謠に在つては、小にして弱く、祝詞に在つては、大にして強し。しかも、その小にして弱きものは、大抵山野のものに屬し、大にして強きものは、主として海洋の事に屬す。これらに據りても、また神殿の文學優美の文學の種別は、自づから明らかにならるべし。

と
繼弱と豪宕

句々の巧妙なる排列は、未だ、當時の人々の腐心するに到らざると

反覆

對句

ころ、却つて、同意を反覆して、聽者の記憶を確實にし、わが感情と、思想とをして、十分に透徹せしめむとせり。こゝに於いて、反覆を生ず。同音を反覆し、同語を反覆し、同句を反覆す。而して、遂に、同句形を反覆するに及んで、對句を生ず。こゝに到つては、すでに、同一の意を、多少異なりたる語句によつて反覆するにあらずして、相異なりたる、寧ろ、正反對なる意を、同一の形式を有せる、異なりたる語句によりて反覆するものとなれり。これによつて、對偶と、排列との妙は生じて、形式の美、稍々整頓せり。然れども、こゝに考ふべきは、これらの對句と云ふもの、未だ全く、反覆の域を脱し得ざるにあり、精確に相對せずして、却つて、同意と、同形式とに於ける反覆に近きもの多きことこれなり。祝詞に於いても、歌謠に於いても、この以外に出づるもの幾何もあらず。この類の、眞の價値を生じ來るは、實に奈良朝時代を俟たざ

るべからず。

これらの諸修飾に入る最初に於いて、すなはち全體の歌詞を誦し出だす最初に於いて、その前提として、また一種の修飾は生じたり。枕詞と云ふもの、これなり。枕詞は、寧ろ冠辭と云ふを適當とすべし。これ、この者歌詞の前行者となるのみならず、この一句を終へて、他の一句に入るに於いても、また、唐突の感を拒ぎ、聯想の美を逞くせしむればなり。故に、歌謠の長きものに於いては、出づること頗る多く、或は、次なる語の屬性たるべきものを舉げ、或は、譬喩となるべきものを以てし、或は、地勢により、或は、地名により、或は、同音の反覆により、或は、同音異義の利用即ち、懸詞により、一觀念を得て、その記憶の消失せざる間に、更に他の一觀念に入らしめむとす。その來るところ、今日に於いては模索に苦しむものありといへども、猶舊形式を趁ふ詞人の

枕詞

序詞

誇張

の間に慣用せられたり。以上云ふところ、その長さに於いては、大抵五音の一句を出でざるが、これのみにして止まず、更に、一步を進めて、五、七の二句を占め、または五、七、五の三句をも占むる長大なる形をなせり。これすなはち序詞なり。一觀念を述ぶること頗る長く、聽者は、歌者の云ふところ、到底、この以外に出でずと思惟する時、一轉して、他の觀念に突入す。聽者の驚愕、歌者の得意、想見するに餘あり。然れども、こは、遊戯の甚だしきもの、敬虔なるべく、莊嚴なるべく、反覆、叮嚀なるべき時機に於いては、取るべきにあらず。故に、歌謠には存すれども、祝詞には發見すること能はず。而して、これらの諸種の修飾を通じて見得るものは、著しき誇張なり。事物を形容し、反覆し、説明するに於いて、その態度、後世に比しては、頗る豪快なり、しかも粗笨なり。かくの如きは、疎豪の氣、猶その間に磅礴たると、精緻なる感情の、

未だ養成せられざるとに由るべし。これら諸種の修飾は、後世に到つても、殆んど變化するところなし。たゞ、後の、赤裸々にして、眞に向つて肉薄せんとする傾向に對しては、全然風馬牛なりといへども、猶或者は、一部人士の間に襲用せられて、多くの色彩を加へたり。

更に、全體の長短及び句法の如何を考ふるに、祭神の詞は、時機により、場合に應じて、或は長、或は短、その間に、一定せるところを見ず。然れども、大體に於いて、三大段に別つことを得べし。すなはち、序と稱すべきもの第一段、開闢以來の事蹟を陳ぶるもの第二段、懇願、希望の意を陳ぶるもの第三段なり。而して、その中心とするところは、第三段に在り。歌謠に於いても、また長短、錯雜して、一定するところあらず。最も短きは三句、長きは四十九句に到る。然れども、その中に就いて、最も多きは、五句より、十一句に到る間のものにして、五句に由つ

形體

三大段

五句の形

一句の音數

て成れるもの、ことにその主たるを見る。轉じて、一句の音數を見るに、或は三、或は四、或は五、或は六、或は七、紛紛として統一するところを見ずといへども、最も多きものは、五と七となり。而して、更に、これらの五、または七は、交互に連續するを普通とす。更に、これが五、七、五、七、七と、五句相連續するもの、また多きに居る。後世云ふところの短歌は、すでに、この時期に於いて、盛行せるを見るべく、而してまた、われ等日本人は、祖先よりして、長大なる形式を利用すること能はざるを知るべし。

以上述べるところのものは、我が國文學の淵源のみ、萌芽のみ。未だ、これに於いて、多くの絶對的價値を寄與すべからず。これを過重して、理想時代の如く信する學者の陋や笑ふべし。吾人は、たゞ、わが國文學の始源の、かくの如きものなるを知れば足れり。

- (1) 延喜式第八卷所載のもの等
- (2) 古事記、日本書紀、風土記、萬葉集所載のもの等

第二章 情中心時代の二(奈良朝時代)

概説

一道の源泉混々として盡きずといへども、豈に直ちに湖海の大をなすことを得むや。細流を并せ、涓水を集めて、洋々の美初めて見るべし。前代の文化は、物質的にはた精神的に幼稚の境を脱すること能はず。その發達の度も甚だ遅々たりき。故に、たゞこれのみを以てしては、幾百年を過ぐといへども、文華の絢爛たるべきものあるを期せむや。その時代の末に於いて、隋及び唐よりして、銳意支那、印度の文化を將來して、以て我れに移植せし幾多の留學生、留學僧及びその當事者は、わが國人の永久に、尊崇敬慕すべき恩人と云ふべきなり。

外國文明
の影響

これらの移植によつて、この時代に入りては、文化は急速に進歩して、制度に、建築に、工藝に、學術に、宗教に、異常の發達を示せり。時代を異にし、情勢を一にせずといへども、その急轉直下の勢は、殆んど明治維新以後に類せり。

美術の發達

當代に於いて製作せられ、しかも今日に存して、ことに見るべきものは、佛法的美術の發達なり。當時、佛寺の造營、佛像の彫刻、鑄造、年と共に多く、それらの精緻なる、巧麗なる、粉本の有無は措くも、妙は言辭の外にあり。これを、前代の末期のそれらに比しては、具眼者ならずとも、その逕庭、自づから明らかなるものあり。これに次ぎて見るべきは、漢詩文の製作なり。今日傳ふるところの詩文、ことに詩篇(ウ)を見るに、孰れも、和臭を帯びて、唐人の音にあらずといへども、現存の諸篇、たゞ、その殘缺に過ぎずと云ふに到つては、盛と云はざるべからず。

漢詩文

この及ぶところ、一方には、國史の選述となり、風土記の編修となり、他方には、字を假りて音を寫す、いはゆる萬葉假名の製作となれり。而して、更に、片假名、平假名となり、遂に、意に隨つて國音を寫し出すに及びり。

國民の思想的發達

佛法と漢學と、その及ぶところかくの如くなりしを以て、おのづから國民の思想は豊富となり、感覺は鋭敏となり、觀察は緻密となれり。故に、それに伴ふべき國民的文學の發達も、理に於いて、また大いに見るべきものあるべし。實に、當時に出でたる幾多の韻文(ウ)と、韻文素の多き散文と、ともに彼れらの文學の形式を採り、或は思想を容れて、壯重に、委曲に、よくその所思を盡くし、情懷を述べたり。然りといへども、通覽するに、一般の文學の、同時代の美術に追隨すべく、若しくは並行すべき價值あるものを見ず。當時の諸篇後世の歌人が、金玉の如

美術に劣れる文學

く尊重するものありといへども、それらの精巧無比なるに比して、遜色なしと云はむや。たゞ、模倣的詩文の律格に拘束せられて、口吃して云ふ能はざるが如きものに比して、軒輊なきのみなり。これ、その由るところ、蓋し、彼れとこれと、資料を異にし、彼れとわれと、歴史を異にし、しかも、わが文學の多くは、淺薄、鄙近なるものに止まり、高遠なる思想と、没交渉なりしが爲めのみ。然れども、國民の思想の變化は、決して、輕々に看過すべからず。現代の歡樂にのみ謳歌せし國民は、佛法によりて來世を知り、諸行の無常にして、浮世の憑むべからざるを知れり。また、漢學によりて、天の敬ふべく、地の恐るべきを知り、威儀の修飾を知り、談理の法を知り、更に、道教によりて、隱逸、閑居の樂しむべきをも知れり。故に、著しく神經的となり、感情的となり、恐怖畏敬の念、漸く多きを加ふるに到れり。たゞ、わが國人は、現世を超越する

神經的、感情的

現代的利益

固有的思想の破壊

こと能はず。佛法の理は知れりといへども、猶希ふところは佛の利益なり。祈禱も、造佛造寺も、主として、これが爲めにす。朝廷の信仰も、亦國家安康の外に出でず。この結果として、種々の瑞祥より、黄金發掘に到るまで、また佛の加護となせり。漢學によつて學びしところも、かくの如し。幾多の瑞祥、また、天地の寄與するものとなせり。かく、國民の取るところは、すべて表面的にして、佛法と、漢學と、共に、その眞諦に入ること能はざりきといへども、猶從來の純日本思想は、著しく破壊せられたり。漢學は、寧ろ表面的にして、佛法の如く内觀的ならざるを以て、固有思想に衝突すること甚だしからずといへども、佛法にあつては、頗るこれに反せり。殊に、從來國民の尊崇措かず、政治は、すなはち祭神とせる大小の神祇と、佛法の主とせる三世の諸佛とは、その主従の位置、判然し難きものあり。濁世脫離と、忠君愛國

純日本思想
の發揚

とは、相容れざるところあり。故に、無教育者は措く。多少の有識者は、その歸趣に迷ひたるが如し。韻文に於いて、更に散文に於いて、この痕跡は、歴々として指點すべし。然れども、また、この外來思想に刺激せられて、純日本思想は、却つて、大いに、その光輝を發揚せるもの無きにあらず。すなはち、君は神、山川、草木は悉く君が有、君の向ふところ、行くところ、山禽、野獸、悉く畏伏す。この君の前に立ちて、男子は武器を取りて、匪躬の忠を盡くし、しかも、家を重んじ、名を重んじ、妻子を愛し、名を竹帛に垂れむと云へるこれなり。これまた、從來、思想的に存在したるところ、異とするに足らずといへども、しかも、かく明白に歌ひ出たされたることあらず。かくの如きもの、實に、外來思想の刺激に外ならず。當代の文學を讀むもの、特に、この點に留意せざるべからず。

當代の三
區劃

以下、當代の文學の、解説の順序として、三區劃を定むべし。その一は天平以前の時代、これを第一期とすべし。その二は天平時代、これを第二期とすべし。その三は、天平以後の時代、これを第三期とすべし。然れども、これ孰れも大體に留まるのみ。細説に到つては、別に思考するところなかるべからず。

(1) 懷風藻中の諸作

(2) 萬葉集中の諸作

(3) 宣命、風土記

第一節 韻文

一 内容

前代に接續して、この時代は、猶韻文の時代なり。韻文、散文兩立するは、次の時代よりなり。故に、當代に於いて、特に見るべきは歌謠なり。他の、韻文素少なく、散文に近きものは、これに對して廻避すべきもの、豈に三舍のみならむや。當代にして、韻文を缺かむか。猶奈良よりして、幾多の建築物、彫刻物を取り去りたらむが如し、荒廢落莫云ふ可からざるものあるべし。今これを時代的に考察するに、その第一期に於いては、漸次瀰漫し來れる外來思想に影響せらるゝとなく、純然たる固有思想を詠じたるを以て、これを前代の歌謠に比するに、思想的に多くの進歩を示さず。然れども、固有思想の範圍を確守し、

第一期

固有思想の
確守

反抗的態度

第二期

外來思想の
發現
客觀的態度

殆んど、一步もその埒外に出でず、しかも、滿腔の熱誠を以て、唱道、力説せるは、或は、外來思想に對せる反抗的態度なるなからむや。極力、天皇の稜威を歌ひ、皇統の一系列を歌ひ、皇國の尊嚴を歌ふが如きは、その目的とするところ、尋常一樣ならざるに似たり。ことに、祝詞に於いて述べ來りたるところを敷衍して、滔々として幾百言を費すところ、意氣の大きい昂れるを見るなり。

然れども、時少しく下りて、第二期に入れば、外來思想は、漸く現はれ來る。花鳥を詠じ、山岳を詠じ、墳墓を詠じ、庭園を詠する等、従來われにあらざるところなり。主觀的態度の、漸く變じて、客觀的態度に移りたるもの、詩賦の影響にあらすして、何ぞや。三綱、五常を説きて、道德の腐敗を嘆き、社會組織の不備を悲しみて、貧弱者に同情するは、儒道の感化にあらすして、何ぞや。更に、また酒を讚し、閑放を賞し、世事

の棄つべく、隱逸の樂むべきを述ぶるは、老莊の極致にあらずして何ぞや。浮生は憑むべからず、百年の賞樂は盡き、八大辛苦は來る。しかも、來世は、轉々として、生死の間に彷徨すと云へるが如きは、著しき佛法思想にあらずして何ぞや。前期の反抗的態度は、こゝに到りて、殆んど蹂躪せられ、外來思想は、固有思想を抑壓せるなり。

時愈々降りて、第三期に入るも、前の態度は、猶依然として繼續せり。儒道的道德律、佛法的厭世觀は、猶歌はれたり。然れども、遂に、固有思想は、新しき形態を以て現はれたり。すなはち、新しき意義を有せる忠君の至情、愛國の精神は、十分に發揮せられ、男子の理想、臣下の義務は、これによりて更に明らかに、いはゆる武士道の發揮は、こゝに初まれり。外來思想に對せる反抗的態度の消滅せるもの、こゝに於いて、再び新しく興起して、且つ光彩を煥發せしめたり。

第三期

新日本主義

- (1) 柿本人麿の諸作
- (2) 山部赤人の諸作
- (3) 山上憶良の諸作
- (4) 大伴旅人の諸作
- (5) 山上憶良の諸作
- (6) 大伴家持の諸作

二形式

當代の文學は、思想的に價值ありといへども、眞の價值は、却つて形式に存するが如し。第一期に就いて、ことにその然るを見る。その修飾に於いて見るに、譬喩に在つて、天皇を日、皇太子を月に比するは、日本國民として、何人も想到するに難からざるところなりといへども、戰聲を雷鳴、鼓聲を虎嘯、旗を野火と云ひ、弓弦の響を、冬の林に嵐の

第一期
修飾の發展
譬喩

對句

息吹くと云ひ、亂箭の雨注を、大雪の亂れて來ると云ふが如きは、宛然たる詩人の語、精彩の奕々たる者ありて、後の慣用相襲ぐものとは、全く選を異にせり。第一期の韻文の價値、半はこの譬喩に存すと云ふも、誣言にあらず。對句に到つては、譬喩に比して、數に於いて多からずといへども、また異彩を發せるを見る。從來慣用せしところのものは、多くは二句の對なり。この以上に上るものは、たゞ、聯珠の如く横に相連なるに過ぎず。然るに、この時に於いては、二句以上相連なるのみならず、また、他の句にも連なり、句々聯關して、縦にも連なり、彼れと、これと不離の關係をも起さしむ。しかも、これあるが故に、句法の緊縮を來し、聲調の變化を生じ、全體をして、彩華の燦然たるものあらしめたり。然れども、これを用ゐること、多きに過ぐるに及んでは、すでに繁縛に陥り、冗慢に失せり。枕詞は、更にこの時期に於いて、多

枕詞

序詞

形體の膨脹

くの製作を見る。屬性を云ふもの、譬喩となるべきもの、地勢によるもの、音調によるもの、懸詞によるもの等、皆前代の域を脱せずといへども、愈々出づること、多くして、益々巧妙なり。これの進展したる序詞は、數に於いては前者に劣れりといへども、猶前代よりも、その形を長くし、更に、その間に、枕詞、序詞をも加へて、讀者をして、全く一觀念に没頭せしめ、突如として、他の觀念に轉換せしむるに一種の妙あり。今日より見れば、極めて幼稚なりといへども、枕詞とともに、當時の趣味如何を察知するに難からず。たゞ、全篇の半以上、この修飾を用ゐるものあるに到りては、過ぎて及ばざるを見るなり。

かく、多く諸種の修飾を使用せるを以て、その内容の増加とともに、形體は膨脹せざるを得ず。すでに、五十三句以上のもの五、その一は、百四十七句にも達せるものあり。しかも、その句を排し、語を連ぬる、

叙述の順序

たい意の向ふがまゝにせず、一定の形式により、一貫の規律を守り、歩武整然として、一糸亂れず、而して、多大の生氣あり、情趣あり。或は、勇快豪爽、鐵騎の營を斫るが如く、或は、情緒纏綿、遊糸の樹に纏ふが如し。その初は、大抵、枕詞を以て起し、多くは、双頭の形を採りて、その主體を説き、承くるに對句を以てし、その主體に對する情趣を述べ、感慨を述べ、更に、平叙の句を以て、全體を終結して、萬鈞の重あらしむ。皇國の尊嚴を説き、皇威の絶對無限を述ぶる、祝詞の句法によるところあるは、本よりなりといへども、全體の結構、組織に於いては、猶漢詩の排律法を參酌せるにあらずや。或は寧ろ、翻譯的に襲用せるにあらずや。思想に於いて、反抗的態度を示せりといへども、形式に於いては、大いに、外來文學を模倣し、しかも、それによりて、多大の喝采を博せるにあらずや。

第二期

平叙的傾向

然れども、以上の諸修飾は、その盛を、第一期に示せるのみ。第二期に到れば、譬喩は、減少して出づること少なく、時にあるものは、すでに翻譯臭を見る。對句も、發展せるものありといへども、大體に於いて衰頹し、枕詞も、序詞も、またともに多からず。全體に於いて、平叙に傾けり。しかも、語句に於いて、多少の漢佛の語をさへ含み來れり。故に、日本語の純正は、こゝに傷けられたりと云ふべし。これ、その據るところ、たい、修飾的技巧に於いて墮落せるのみならず、その内容の膨脹の、これを顧慮する餘裕を與へざりしにあり。しかれども、その膨脹せる内容も、これらの修飾排除の結果として、全體の長さを、八十句以上に上らしむるに到らず。故に、形體に於いて、また貧弱となり。従つて、いはゆる長歌は、こゝに衰微したり。

第三期

第三期に到れば、如上の風は、愈々進みて、譬喩、枕詞、對句、ともに減退

修飾の貧弱

し、時に、序詞の、長くして十一句にも上るものありといへども、その間
に、殆んど、枕詞をも、對句をも用ゐざれば、散漫たるを免れず。内容に
於いて、豊富となれるに反して、修飾に於いて、著しく貧弱となれり。
然れども、既に云へるが如く、内容の増加せるに拘らず、修飾の減少に
よりにて、全體に就いて、長篇は減少せり。而して、從來盛行せし五句の
歌すなはち短歌は、著しき速度を以て増加し、遂に、次の時代に入りて
は、短歌すなはち韻文の情況を呈せり。これと同時に、一たび勢を失
ひたる即興的趣味は、韻文の精神となるに及べり。

(1) 植本人麻呂の諸作

(2) 山上憶良、大伴旅人の諸作

(3) 大伴家持の諸作

第二節 散文

題して散文と云ふ。たゞ、韻文素少なきを意味するのみ。眞の散
文は、次の時代より發達す。故に、こゝにあるものは、韻文的散文とも
云ふべからむ。而して、これらは、歌謠に比しては、多くを云ふ價値な
し。今は、内容と形式と、併せてこれを云はむ。當代の歴史書(1)の類、地
理書の類、いかによく漢字を利用して、古語を集録せしか、漢文により
て、地勢、物産、傳説を記載せしかを知る可きのみ。たゞ、祝詞の形式を
襲用して、大命宣傳の具としたる、宣命に於いては、多少の考慮を費す
べし。然れども、祝詞は、祭神の一事に限られて、頗る藝術的なり。こ
れに反して、宣命は、國家重大の事件を宣傳す、自づから、實用的ならざ
るを得ず。故に、その結果として、文學的價値は、鮮少なるを致せり。

内容

外來思想の
影響

而して、その多く出でしは、第二、三期に屬するを以て、これに在つてもまた、歌謠に於けると同様の思想の瀰漫せるを見る。その一は、支那思想の著しきことなり。瑞祥に基づける改元の如きはこれなり。天地を恐る、天地の心を怖ると云ふは、當時の支那的新思想なり。われに在つては、天は故郷なり懐かしむべし、怖るべからず。その二は、印度思想の流布すること、時とともに愈々盛なることなり。皇室の尊重甚だしかりしを以て、瑞祥もまた、諸佛、諸天の庇蔭に依ると云へるあり。「三寶の奴と仕奉る。」の句あるに到つては、影響するところ、大いなりといはざるべからず。然れども、この間にありて、固有思想の上下一致、君臣輯睦、天下を舉げて一家となすが如きは、歴々として微すべきこと、猶韻文のそれと、全く同一なるものあり。

形式

實用的文學にありて、多大の修飾は、畢竟無用の事に屬す。譬喩と

修飾の減少

して、擧ぐべきものも、大抵、直喩に留まりて、隱喩に入らず。意味の明晰を希へばなり。對句も、また多からず。事件の簡單なる時、全篇悉くこれによりてなるものありといへども、たゞ一篇に過ぎず。これ、特にかくの如くすれば、作意に陥りて、意味の暢達を害すればなり。反覆のみは極めて多し。數語を用ゐて一意を云ひ、對者の何人たるかを問はず、務めて、印象を明瞭ならしめむとしたればなり。故に、今日よりしては、煩縟の感、嫌厭の情を起さしむるもの、頗る多し。すべてに於いて、修飾を斥けて、眞意を述べむとす。韻文の第三期と對して、同傾向の顯著なるを見る。

要するに、當代の文學は、その初は、形式的に發達し、漸次内容的に進歩し、遂に、文學として、形式的價值の、あまりに貧乏なるまでに及べり。しかれども、その内容に於いては、最初の外來思想に對せる反抗的態

結論

度の再變して盲從的となり、三變して、新固有思想の發揮となりしを以て、形式的價値の失墜は、却つて内容的價値の昂上を來せり。この内容は、次の時代に於いて、更にまた、新日本思想を生じ、従つて、自づから、それに伴ふべき新形式を生じ、わが國文學最初の黄金時代を現出せしめたり。

(1) 古事記、日本書紀、風土記、氏文

(2) 聖武天皇の宣命

第三章 情中心時代の三(平安朝時代)

概説

外國文明の輸入、外國思潮の横流、外國文藝の崇拜によりて生じたる國家的屈服は、國民の自覺によつて、雪辱せられざるべからず。而して、更にこゝに、國家的色彩を帯びたる新文明、新思潮、従つて、また新文學の興起せざるべからず。前代は一張一弛あり。その末期に於いて、新固有思想の興起を見たりといへども、概するに、猶外國崇拜の甚だしき時代なりき。制度と云ひ、美術と云ひ、工藝と云ひ、一に彼れに倣ひたりき。文學も、亦その範圍を出づること多からず。たゞ、言語を異にし、約束を一にせざるを以て、わが國の文學として特立する

國民的自覺

最初の黄金
時代
當代思想
の中心

情の尊重

を得たりしなり。若し、同一の言語、同一の約束を有せしならば、或は全く、似而非なる支那文學となり了りしなるべし。然れども、彼れと、此れとは、建國の基礎を異にし、祖先を異にし、歴史を異にし、加ふるに、國語を異にせり。同一の金銅、木石を資料とせる彫刻、建築の類とは、歩趨を一にすること能はず。此の間隔は、國民をして、豁然覺悟するところあらしめ、全く彼れに走らむとせるものを一轉して、わが國語の特色を發揮し、わが國民の新しき情緒を歌ふに到らしめ、遂に、わが國文學最初の黄金時代なる當代を現出せしめたり。これに依りて見れば、上古と奈良朝とは、たゞ、この時代の準備時代に過ぎず、この藝術至高の殿堂に達すべき段階に過ぎず。

然り而して、この文學の基礎を構成したるものは、洗煉せられたる感情なり。優美の二字、高雅の一語を以て蔽ふべき情念なり。從來

當代の要
求
美の希求

の文學もまた、その中心とするところ、悉くこれなり、決してこれ以外に出づるものあらず。然れども、その情や、疎豪にして趣致に乏しく、幼稚にして精緻ならず。この時代に現はれたるものに比すれば、殆んど零壞も管ならず。而して、歴史上幾多の事實の證明するが如く、かくの如きもの、すでに、社會の中心をつくれるを以て、すべての文學に於いても、その基礎をこゝに置けるは、また當然なり。故に、一辭の末、一語の間、苟も、文字あり、言語あるところには、必ず洗煉の情味を見らるべく、高雅の風趣を味ふべし。實に、この時代の如く、感情を尊重して、これを以て、文學の中心とせし時代あらず。

この感情の尊重に伴ひて來るものは、美の希求なり。こは、殆んど何れの時代にも存するところ、決して、この時代に就きてのみ、云爲すべきにあらずといへども、當時の優等國民の有たる、支那文學の教ふ

るところによりて、一層その度を高めたる美の希求は、この時に於いて現はれたり。宮殿調度より初めて、衣冠服飾に到るまで、たゞ美をこれ希ふ、殆んど實用の如何、攝生の如何を論せず、美あるところ、相率かてこれに走る。この傾向と趣味と、また頻々として文學に現はれ来る。而して、これによりて、語句の華麗は誘はれ、聲調の流滑は導かる。この結果として、平安一朝の文學は、綺葩なり、艶麗なり。理智の影なく、感情の閃きのみあり、剛強の態なく、優美の致のみ存せり。これを前時代に比すれば、その形式と内容と相違すること、卒然としてこれに對すれば、全く國と人とを異にするが如し。

この感情の尊重と、美の希求とに伴ひて、自づから起るべきは、逸樂の風なるべし。情の欲するところ、美の存するところに従へば、人は、必ず實務を離れ、勤勞を廢して、男女雜居して、花晨、月夕、悠々宴樂し、諷

逸樂の風

短歌の盛行

詠するに到るべし。この故に、活動の範圍は、年とともに盛り、遠境は猶蠻境の如く思惟するに到りしより、京城は愈々籠居の地、而して、逸樂の域となれり。詩歌管絃の會は、晝より夜に續き、夜より曉に達し、不健全なる戀愛は、趣味ある遊戯として、この間に行はれたり。而して、この趣味に最も適合せる文學は、形體の短少にして、それより發する詩趣の津々たるものなるべきを以て、前代に於いて、すでに多くの諷詠を見たる五句の歌、すなはち短歌は、この時に於いて、盛行の絶頂に達し、且つ理想的發達をなし、すべての韻文の代表をなすに及べり。かくの如くなるを以て、文學の形式は、一般に云へば、短少なり。普通に長歌と呼ぶ長大なる韻文の形式は、全然衰微し、また前朝の遺響を襲ふものなし。時代と共に生せる幾多の新しき散文はありといへども、その根柢とするところは、畢竟短歌にあり。短歌に關する逸話

形式的中心

を、連續的に記述し、或は、これに加ふるに、人情の纏綿を以てせるに過ぎず。短歌は、形に於いて、實に、當時の文學の中心をなせり。

佛法の弘通

然り而して、これ等の文學に影響せるところは、佛法と、漢學なり。佛法は、すでに、前代に盛にして、その影響するところ、甚だ大いなりきと云へども、當時の如く、廣く世に弘通せるにあらず。當時は、新興の眞言、天台の二宗、ともに本地垂迹説によりて、固有思想とよく調和し、ことに、名僧、知識の輩出せしを以て、その流行の度極めて速きを致せり。但し、當時の僧侶の所説は、現當二世に涉れりといへども、其主とするところは、現世にありしを以て、佛法は、醫藥と同じく、疾病に關する應急手當の如きものとなれり。しかも、猶名家の、常に名醫を聘するが如く、權力者は、名僧に歸依し、且つ、堂塔の建立、寺領の喜捨をなし、自己の富貴を誇視する一手段となせり。故に、信仰者は多し

宿命説

漢學の趣味

といへども、未だ、佛法の神髓に入らず、安心立命を思はず。然れども、その悲觀的傾向は、著しく文學に現はれ、飛花、落葉に、人生の須臾を觀じ、浮世の無常を嘆ずるは、尋常のことに屬せり。加ふるに、かくの如きもの、前代の如く、翻譯的ならずして、自己の胸奥の最底より出づ。勿論、その間には、たゞ佛者の口吻を擬し、先覺者の聲を以て任ずるが如きものありといへども、大體に於いて、眞實の音なり、悲痛の叫なり。ことに、當時の佛法より出でたる宿命説は、人心に入ること甚だ深く、失敗も、不幸も、天災も、疾病も、皆この宿世の一語によりて解決して、自づから慰藉するを常とせり。これ或は、その本づくところ、寧ろ我が固有の樂天主義によるべからむも、これに、相當の理由を附したるは、當時の佛法ならずんばあらず。

漢學もまた佛法と相如けり。但し、彼れの内容的なるに反して、こ

玩詩文集の愛

れは、専ら形式的なり。當時の文學に、悲哀の色を帯びしめたるものは、主として佛法なりといへども、詩賦の悲壯、沈痛の趣味も、またこれに、一臂の力を加へたる感あり。たゞ、當時の漢學は、多く文字の事に屬す。華麗にして、且つ洗煉せられたる語句の、適當なる調和と、配合とは、いかに、多大の感興を當時の人士に惹き起さしめたりしぞ。詩文の集は、忽ち愛玩の書となりて、多くの模倣者と、隨喜者とを生じ、經術の書は、讀まるといへども、殆んど何等の影響を與へず。而して、この影響は、また忽ち文學に現はれ來り、優麗の語、艶美の辭、相次ぎ、相接して、花天月地、一個の別世界を現出し、後世をして、隨喜止まざらしむるに及べり。

畢竟するに、當代の文學は、從來傳承し來りし國民性に、巧みに同化したる漢佛の思想を合せて、高雅にして、氣品ある新日本思想の上に

理想的發達

當代の三區劃

立てり。たゞ感情をのみ尊重し、美をのみ希求す、その及ぶところ、流弊甚だ多しといへども、單に、文學そのものとして見れば、理想的發達をなしたるものとして、推稱せざるべからず。

今、變遷の大體によりて、この時期を三分すれば、延喜以前の時代を、第一期と云ふべし。藤原氏全盛時代を、第二期と云ふべし。而して、院政時代を、第三期と云ふべし。故に、以下、この順序に従ひ、この各時期の文學の、内容と形式とに就きて叙述せむとす。

第一節 韻文

一 内容

外國文學の崇拜は、當代の始に於いて、殊に大いなり。幾多の學校は創められ、幾多の詩篇は作られたり。然れども、自國の思想は、自國の言語を以て、述べられざるべからず。この故に、漢詩文の流行は、遂に、一轉して新韻文の流行となれり。敢へて、新韻文と云ふ。その用語に於いて、更に、その聲調に於いて、殆んど前代のものにあらず。況むや、その思想に於いては、相距ること數十百歩のみならず。これの纖巧と、かれの素朴と、これの優美と、かれの道勁と、これの複雜と、かれの簡明と、時間的關係を離れて相對すれば、殆んど、同一國人の歌として見るべからず。かくの如きもの、漢學と、佛法と、相倚り、相扶けたる

新韻文

第一期

悲觀的傾向

感情の尊重と、美の希求とに職由せずんばあらず。

時期を趁うてこれを見るに、その第一期に出でたる多くの韻文は、殆んど、全く短歌にして、長篇はすでにあらず。纖巧、優美の風起りて、長大なるものは、その堪ふる處にあらざりしなり。實に、纖巧、優美の趣は、當時の詩篇に滿ち滿ちたり。しかも、この趣は、主として悲觀の美なり。花に月に、瀧ぐところは、涙、歌ふところは、悲なり。或は、世態の變遷に、悲しみ、人情の浮薄に、悲しみ、羈旅に、悲しみ、老に、悲しむ、物として、殆んど、悲しまざるはなし。而して、これらの歌、また後世の渴仰するところとなりしを以て、遂に、歌としいへば、かく作爲すべきものの如きを致せり。前代との差異以上の如しといへども、全體に涉つて、前代の主たりし主觀的態度は、儼然として存し、従たりし客觀的態度は、未だ殆んど現はれず。咏物の風は、次期に到らざれば、行はれず。

第二期

取材の一定

當代の韻文は、第二期に到りて完成せるものなり。而して、次々の時期は、これに、多少の變化を加へて、次の時代の初期に及ぼせるに過ぎず。この時期の最初に於いて、ことに見るべきは、取材の一定せることなり。四季の景物より、動植物器財に到るまで、その大體は、前代に於いて定まれりといへども、猶素朴なるを去り、優美なるを存して、その範圍を定めたるものは、この時期ならずんばあらず。而して、これを取扱ふに、その趣味を叙するのみを以て満足せず、必ず、これに淺薄なる解釋を加ふ。すなはち、客觀的態度に次ぐに、主觀的態度を以てせり。その極、云ふところ、往々理智に偏するを以て、談理に陥りて、興趣を失へり。然れども、取材の一定せるに従つて、觀察は緻密となり、著眼は奇警となり、微に入り、細を穿ち、前代に於いて、未だ想到せざりしものを出せり。而して、前期の悲觀的傾向は愈々盛にして、歡喜を

推理的傾向

純客觀的態
度の興起

第三期

新舊二派

歌へるもの、殆んどこれあらず。これらの風潮は、時を経るに従つて、少しく變化し、前代を承けて擴充したる純客觀的態度は起り、自然を謳歌するもの、漸次多きを加へたり。色彩的觀念は、隨つて發生し、歌を作ること、猶繪を作るが如き状態を呈せり。これによつて、理智の偏重は、稍々その勢を減じて、次期に入れり。

第三期は、我が國文學に於いて、初めて、公然たる二流派を生せる時期なり。その流派の⁽¹⁾一は、専ら第二期の初期を理想として、これに憧憬するもの、⁽²⁾二は、第二期の末期の風を承け、更に現代を標準とするものなり。故に、舊風を墨守するものは、専ら前期の初期の範圍以外に出でざらむとすと雖ども、全く現代を超越すること能はず。新風を主張するものは、務めて、現代に接觸せりといへども、從來の範圍を脱却することを得ず。たゞ後者は、一木、一草をも忽にせずして、觀察し、

中間の一派

叙説す。故に、その結果として、著しく神經的なり、而して、遂に奇僻に陥り、人情に遠ざかるに及べり。客觀的態度は、新派に於いて益々發達し、色彩の絢爛は、繪よりも勝れり。この兩派は、相争鬪せしが、遂に中間に於ける一派⁽⁷⁾を生じ、一方の奇僻を抑へ、他方の固陋を矯めむとせりといへども、猶その偏するところは新派に在り。しかれども、遂に、平凡に陥り、單調に流れて、精彩なく、光輝を缺けり。

諸派の渾融

故に更に、こゝに、これらの諸派を集めて、溶鑄し、渾成せる一新派は起れり。すなはち、奇僻の風なくして清新に、難澀ならずして平易に、而して、興趣を失はず、巧みに、主觀と、客觀とを配合し、いはゆる情景一致の境に入らしめ、しかも猶絢爛にして氣品あり、餘韻あるもの、これなり。今日よりして見れば、猶固陋甚だしく、範圍狹隘なりといへども、當時に在つては、前諸期の集大成にして政治的統一と同時に現は

れたる文學的統一に外ならず。而して、鎌倉幕府の威力、次の時代に入りて、偏く天下に布きたると共に、この統一的流派は、益々發展して、韻文界の大勢力となれり。

- (1) 在原業平、小野小町等の諸作
- (2) 紀貫之、凡河内躬恒等の諸作
- (3) 曾根好忠、藤原公任等の諸作
- (4) 藤原基俊等
- (5) 源經信、同俊頼等
- (6) 源俊賴等の諸作
- (7) 藤原顯輔、同清輔の一派
- (8) 藤原俊成の一派

二 形式

第一期

第一期に於ける韻文の内容の變化は、形式の變化と一致す。長篇

長篇の衰微

の衰微して、短歌のみの諷咏せらるゝに到れる事、即ち形體の縮少せるは、その主なるものなり。その聲調も一變して、優美を欲する結果、七五の兩句の一連となりて意をなし、遂に多くの三句切を生じ、歌は中間に於いて、切斷せらるゝ傾向を生じたり。後世、連歌の隆盛の因はこゝに存せり。この優美を欲するよりして、多くの助辭は使用せられ、一種の餘韻と、風趣とは加はりたり。かく、形式の短少となりし結果として、従來、長歌に必要な修飾たりし對句は、大いに減退し、また序詞も多く顧られず、枕詞の大部分も、その用を失へり。然れども、新しき枕詞の發生せざるにあらず。特に、當時囑目せる事物を用ひて、一新機軸を出せるものあり。譬喩は、これに反して、多くの新しきものを案出し、花を雪に比し、霞を衣に比し、玉を涙に比する等、後世襲用して、止まざるものを生ぜり。これらよりも更に、當時に重用せられ、

中間の切斷

對句、枕詞

譬喩

懸詞

第二期

序詞の進歩

後世に甚だしき影響を與へたるものは、懸詞なり。懸詞は、枕詞を本義と聯關せしむる際、既に用ゐられたるもの、特に奇とすべきものにあらずといへども、枕詞を離れて、單獨に、文中に使用せられたるは、殆んど當時を以て初とすべし。而して、時を經るに従ひて、用ゐらるゝこと愈々多く、才情流露の趣は失せて、興言利口の風、漸く發生せり。第一期の修飾は、第二期の初に到りて完成せり。内容の限定せられたると共に、形式も、また限定せられて、殆んど動かすべからざるものとなれり。七五の聲調は確立して、首々皆この範圍を脱せず。従つて、三句切は益々多きを加へたり。序詞と、枕詞とは、前期の情態を承けて、猶新奇なるものを生じたり。就中、序詞は、縁語と連關するに到りて、新意義を有するに到れり。譬喩は、愈々斬新、且つ精緻にして、後世をして襲用止まざらしめたり。懸詞も、また用ゐらるゝこと多

く、遂に、物名の一體を出して、歌をして遊戯に陥らしむるに及べり。更に、この時期に於いて、特に注意すべきは、縁語の重用なり。この修飾は、前期に於いても、すでに少しく現はれしが、この時の如く、明瞭なることあらず。一語を著くれば、他處に、それに連關せる一語、または數語を配布して、相呼應せしめ、いはゆる首尾相救ひて、常山の蛇勢をなさしめしは、進歩せる技巧といはざるべからず。然れども、遂に彫蟲に過ぎて、嫌厭の情を起さしむるものも多し。たゞ、これを、序詞と連絡せしめて、一個の完全なる内容を構成せしめ、前代の疎漏を補へるに、意義ありと云ふべし。かくの如く、すべてに於いて進歩せしとともに、範圍は、自づから限定せられたるを以て、その中期及び後期は、全くこれに盲従せり。多少の變動はありといへども、たゞ小波瀾、小動搖に過ぎず。

第三期に到つては、新舊兩派の對立起り、新潮流に棹さゝむとするものと全然第二期の初を模せむとするものとあり。その前者は、新意を述べむとするものなりといへども、その新意とせるものも、從來の範圍に止まり、たゞ、着眼の奇警を以て主とせるより、修飾も、またこれに應じて、奇警なるものを重用せり。諸種の修飾の中、懸詞は、ことに奇拔なり。故に、之を用ゐること多く、殆んど、人の意表に出でむとす。然れども、奇拔のみを以ては、世人の満足を買ふべからざるにより、これをして穩健、妥當ならしむべく、多くの縁語をも用ゐたり。この結果として、一讀しては、何の意たるかを知る能はざるものをも生じたり。しかも、如何なる場合に於いても、懸詞と、縁語とのみなるべからざるを以て、譬喩も、またつとめて奇拔なる者を用ゐて、人を駭かさむとせり。たゞ、その根本は、すでに在り。一步を進めて複雑なら

修飾の適度

しめたるに、才情の發露を見るべし。この傾向の趨くところ、反つて、舊傾向との間に一派を起し、が時は、遂にこれらのいづれにも黨せず。却つて、包括的なる一新派を起したり。この派によりて、懸詞と縁語とは抑制せられて、適度にとゞまり、譬喩も穩健にして、且つ清新なるものに限られ、その他の諸修飾も、各適當の範圍に於いて使用せられて、その内容の清新に伴ひたり。而して、當時に於いて、ことに、現象として注意すべきは、第一、譬喩より來りて、緊縮せる一句の、歌の中心となれること、すなはち、後世、秀句として推稱せらるゝものゝ増加せること、第二、最後の一句に、名詞を用ゐて、終結すること、第三、漢詩の語調を模して、一新聲調を起せることなり。此の如きもの、次の時代の始めに於いて、愈々發展す。

すべてに於いて、當代韻文の形式は、第二期に發達し、第三期の初期

秀句

に於いて動搖し、その末期に於いて完成し、更に、次の時代に及びて、一層の發展を示し、全然内容と步趨を同じくしたりしなり。

- (1) 在原業平、小野小町等の諸作
- (2) 紀貫之、凡河内躬恒等の諸作
- (3) 源順、大中臣能宣等
- (4) 藤原公任等
- (5) 源俊賴等
- (6) 藤原俊成の一派

第二節 散文

国学院大学

一 内容

新しき日本思想の興起と、自國語の尊重とは、幾多の燦爛たる新韻文を發生せしめしが、當時の人々は、すでに、これにのみ全生命を托すること能はざりき。短少なる形態と、拘束とは、今日の如き煩累を起さしめざりきといへども、獨りこれのみによりて、精緻となり、複雑となりし思想を發露するは、不十分なり。更に、これよりも一層自由に、放棄に、當時の思想に適合すべき新しき形式によりて、その新しき情緒を遺憾なく發表せむとせり。この故に、韻文よりは、一層自由なる形式を有せる文學、すなはち散文は、假名の發達とともに、こゝに、完全に發生して、韻文と兩々相双びて、國文學に於ける形式的の二大潮流

散文の發達

第一期

の
り
り
り

を作るに到れり。その初にあつては、韻文の如く、發達、變遷の時期の長からざるを以て、趣向に於いても、辭句に於いても、古拙にして、多くの價値なきこと、恰も、上古時代の歌謠の如し。然れども、時代の要求甚だ切なりしを以て、急速に進歩し、發達して、第三期に到りては、發展の絶頂に達し、後世をして、殆んど追隨すること能はざらしめたり。

第一期に於ける情態如何を検するに、當期の散文は、前朝時代の韻文的散文の餘波を承けて、傳説の記載を主とせり。たゞ、前代の如き、單なる記載に止らず、當時流行せし印度傳説を加へ、支那傳説をも混へ、更に、それらを融合し、溶鑄して、色彩を附し、趣向を加へ、骨を與へ、肉を添へて、一個の文學的價値あるものとならしめたり。この價値あらしめたるころ、すなはち新日本思想の特色ならずんばあらず。

この傳説の記載は、少しく方針を變じて、たゞ、事件的に興味あるのみ

01
伊勢物語

浪漫的
寫實的

八〇
日本文學新史
ならず、文學的に意味あるものを主とするに到りて、當時の流行と連
關して、こゝに、歌傳説の物語を生じたり。歌は、特に短歌を意味す。
短歌中心の傳説は、またすでに、前代にありしところ、こゝに初まりし
にあらずといへども、特に、歌のみを以て、終始するが如きは、この時を
以て嚆矢とせざるべからず。しかも、それに、幾多の脚色を附し、小説
的興味も多くを加へたるのみならず、更に、當時思想の中心たる情的
趣味を以て一貫せしめたるに於てをや。かくの如くして、第一期の
最初の散文は、内容より觀察すれば、いづれも傳説の記載なりといへ
ども、一は、荒誕無稽なる事件を中心とし、一は、男女贈答の短歌を中心
とす。その事件を説くものは、浪漫的にして、短歌によるものは、寫實
的なり。この二流は、單純に飽き、複雑を欲するよりして、自づから合
一する期なからざるべからず。故に、此時期の終に於いては、一半は

3
うつし物語

4
大和物語

第二期

5
茶室物語
6
和泉式部日記

一
諸傾向の統

事件、一半は、短歌の傳説を主としたる散文は、現はれ來れり。すなは
ち、その一半は、佛説に據り、支那傳説に據り、また固有傳説にも據り、一
半は、男女間の戀愛を説ける短歌に據り、こゝに、茫然たる大冊は生じ
たり。かくの如きは、一大進歩として見ざるべからず。然れども、そ
の主とする處は、すでに、現代的なる短歌傳説の物語に在り。
進んで第二期に入れば、前期の末勢を承けて、事件を主とせる短歌
傳説の物語は、盛となれり。而して、その事件は、男女の相愛に關する
を以て、おのづから、歌の小序の、稍、長く、且つ複雑したるものとなれ
り。而して、また、一面當時の活動の範圍は、狹隘なるを以て、これらと
連關して、家庭の物語は、興れり。かくの如きは、事すべて他人に關し、
自己に關せざるを以て、更に、自己の短歌の物語を傳ふべく、自己の偽
りなき叙述なる日記は、發達したり。この諸傾向の、相合して、渾融し

第三章 情中心時代(三)

たるところ、大文字は生じ來る。この時期の終に於ける散文は、すなはちこれなり。緻密なる觀察、犀利なる批評、いはゆる隨筆の雄たるものありといへども、眞の價値は、統一的基礎の上に立てる物語にあり。多くの戀愛的關係の紛亂、錯雜、從來の諸散文の、たゞ散漫に書き、また諸種の韻文の、首々に歌ひたるところを、巧みに縫合して、一つの渾成せる一大短歌傳説の物語となし、更に、また主人公そのもの、歡憂、悲喜を自叙的に叙し來り、多くの歌を挿入して、日記的興味を發揮す。而して、浪漫的なる分子をも棄てず、家庭の物語の趣をも加へ、變化縱横、波瀾百出、應接に暇なからしむ。更に進んで、理想小説の界に入り、人間の罪惡は、時を経て、また報いられざるべからず。因あれば果あり、果あれば因あり。盛者は必衰なりといへども、善は善に報い、惡は惡に報ゆ。然れども、その善なるものも、惡なるものも、今生一世

枕草子
源氏物語

宿命説

のことにあらず、大半は前生にかゝる。これすなはち、宿世なり。よき宿世にしては高爵あり、好配あり。拙き宿世にしては、富貴も榮達も希ふべからずと云ふ。かくの如き宿命説は、當時すでに行はるゝこと廣く、且つ深し。これを取り來りて、一篇の骨髓となし、具體的に發表したるところ、一大進歩にして、前を空しくし、更に、後に倣るべきものなり。而して、また、これらの理想を描寫すると共に、自然を忘るることなく、情毎に景あり、景毎に情あり。情景の一致は、こゝに於いて、その極致を盡くせり。これまた、短歌に於いて企てたるところにして、更に一步を進めたるものなり。すべてに於いて、第二期の末の散文は、前諸種の散文を綜合せるのみならず、思想的に韻文をも打つて、一丸としたるものなり。

かく、綜合あり、集大成あり、恰も、第二期の韻文の如くなりしを以て、

第三期

第三章 情中心時代(三)

八三

趣向の腐心

その思想の範圍描寫の區域は、一定せられたり。故に、この以外に出でむとするは、困難なること、猶第二期以後の韻文の如し。然れども、新手法を出し、喝采を博せむとするは人情なるを以て、韻文に一新傾向を生じたと同じく、第三期にしては、散文は、専ら趣向に腐心することを致せり。故に、一讀して、目自づから新なれども、既に、自然なること能はず、變じて、一種の非寫實主義となり、遂に、第一期の浪漫的傾向を帶ぶるに到れり。而して、小説としての價值は、漸次に減少せり。この趣向の腐心は、一の大きいなる勞作なり。これをして、自然ならしめ、虚構の痕なからしめむとするは、大手腕を要す。若し、これを要せずして、猶興趣あるものあらば、描寫の筆を有するものは、何人も驚喜して、これに赴くべし。故に、こゝに、多くの想像、趣向を要せざる新散文は生ぜり。新らしき歴史、寧ろ歴史物語は、これなり。從來の多く

歴史物語の出現

事實の雜載

の文學的價值なき表面のみの歴史は、とくに廢せられしが、これによりて、こゝに、裏面を描寫したる新歴史は出でたり。この新歴史は、理想化したる一主人公を定めて寫すこと、猶從來の物語の如し。情的趣味と、宿命説とを、その中心となせること、また從來の如し。たゞ、その主人公と、事件と、虚構的ならざるを異にせり。これによりて、形式的歴史は、全く跡を收め、次の時代の中心たる軍記物語の産出は促されたり。また、それに附隨して、書き古されたる宿命説は、諸行無常の佛説に、地位を讓るに到れり。而して、猶この傾向は、他面に於いて、單に、事實の雜載⁽¹¹⁾となり、散文の價值をして愈々低下せしめたり。

(1) 竹取物語

(2) 伊勢物語

(3) うつぼ物語

(4) 大和物語

第三章 情中心時代(三)

- (5) 落窪物語等
- (6) 和泉式部日記等
- (7) 枕草紙
- (8) 源氏物語
- (9) 狭衣濱松中納言等
- (10) 大鏡、榮花物語
- (11) 今昔物語

二 形式

以上述べ來りしところの内容は、如何なる形式に寓せられしか。第一期に於ける散文は、大抵、單文の連續より成る。而して「けり」等の助辭を以て終結したるを以て、單調にして、異なる變化を見ず。古雅の趣はあれども、宛轉繚繞の妙は存せず。戀愛を主とする短歌傳

第一期 單調

懸詞

説の物語に在つても、猶かくの如し、委曲を盡くして、複雑なる感情を寫すと能はず。修飾の方面よりするも、多くの價を見ず、處々に滑稽を云へるものあり、大抵、懸詞よりして來る。かくの如きものも、前代既に在りしところ、たゞ、これを用ゐること故意にして、その態度を笑せしむるに趣あり。かゝる語戲の、當代の流行となれること、すでに韻文に於いて云へるところなり。しかも、漸次、真摯を主とするに到りて、この修飾は、漸次排斥せられ、韻文にのみ襲用せられたり。

第二期

第二期に到れば、内容と共に、形式は大いに進歩せり。聲調の流麗辭句の修飾は、著しく希求せられ、或は對偶、駢儷、四六文の如きものさへあり。然れども、一般の散文は、未だかくの如く技巧的ならず。從來の單文は、複文に變じ、意義の暢達、周匝にして、情緒の長く、且つ饒かならむことを期せり。時を経るに従ひ、この傾向は、愈々進み、此の時

期の末に到りては雅馴⁽⁹⁾の頂點に達し、流暢の極を盡くせり。勿論、この間に、簡勁、直截、直ちに、人の肺腑を刺すが如きものも出でたりといへども、むしろ異例に屬す。一般は、句法あまりに長くして切斷なく、媚々、諄々として説く處、皆聽くべしといへども、しかも、却つて單調の感に堪へざらしむるは、その弊として指摘すべし。その間に於ける助辭、助動詞の用法は、甚だ巧みなり、句々の連續、句々の終結、いづれも自然にして、且つ餘韻の多きを示せり。これ、韻文に於けると傾向を同じくせるものなり。形容詞、及び副詞の適切なる使用は、これに次ぎて見るべし。ことに、形容詞句、副詞句は、最も巧妙に使用せられて、文の句々をして、生氣あらしめ、情趣を曲盡せしめたり。

更に修飾に就いて見るに、ことに進歩せるは譬喩なり。適合の妙云ふべからざるのみならず、品位高く、情味深く、前人の企求して、よく

H. KOIKE

せざりしところ、にまで達せり。これに次ぎて、殊に人目を引くは、引喩なり。一事、一語、大抵出典あり。古歌を引き、古句を引き、その一半を云ひて、全般を聯想せしむ。故に、その結果として、想像の範圍は擴大せられ、餘韻の媚々たるを來せり。然れども、あまりに多く、あまりに煩はしく、たゞ、術學の手段の如く信せらるゝもありて、倦怠の情を起さしむるを、缺點とすべし。これらに次ぎて見るべきは、對照なり。こは、字句よりも、むしろ構想に關す。人物と、人物と、事件と、事件と、孰れも、兩々相對し來る。故に、反映すること著しく、印象ことに、明白にして、多大の効果を與へたり。たゞ、あまりに際やかにして、故意的なるを感ずるに到りては、遂に取るに能はず。かく、すべてに於いて、多少の缺點はありといへども、情味の饒かにして、詩趣の津々たるは、殆んど他の追隨を許さざる概あり。

第三期

第二期は、内容と共に、形式の發展完成を見たるを以て、第三期に到りては、たゞ模倣に止まりて、前期の範疇を脱出すること能はず。しかも、内容の趣向に、腐心するに到れると共に、描寫も、また小巧を弄して、自然なること能はず。句法を長くし、助辭を多くし、修飾を饒かにし、然も叙述を精しくす。故に、含蓄なく、氣力なし。修飾の中に就いて、引喩の如きは、たゞ成句を引きて、殆んど、些の變改をも加へず。譬喩の如きも、剪裁に過ぎて興趣なし。而して、内容の失墜に伴ひて、形式も失墜し、遂に、内容に於いて、趣向の腐心を棄て、歴史的事實を寫したると同様に、技巧的描寫に堪へずして、無技巧的描寫を起し、漢語も、佛語も、俗語も、方言も、當時用ゐしところは、悉く混入せしめ、特別の技巧を加へず、單に事實に寫すに到れり。而して、この風は、漸次廢頽せる漢文と融合して、その勢を加へ、次の時代の新散文成立の因をな

無技巧的描寫

結論

せり。

當代の文學は、新日本思想の發現なり。内容に於いて然り。形式に於いて、また然り。洗煉せる感情は、その中心を作り、熱烈なる美の希求は、その色彩を成せり。而して、内容と形式と、兩々相伴ひて發展し、韻文は、散文に比して、一步を先んじたりといへども、第二期に於いて、共に未曾有の盛觀を呈せり。然れども、盛なるものは變せざるべからず。第三期に到りては、韻文は、動搖の後、大成に向ひたりといへども、散文は、衰頽して、更に、次の時代の新散文に、起るべき餘地を與へたり。これと共に、情念中心時代は去りて、教理中心時代は來り、傾向文學は起りて、純正文學は、明治時代に到るまで、殆んど發生せず。

- (1) 竹取物語
 - (2) 伊勢物語
 - (3) 竹取物語
- 第三章 情中心時代(三)

- (4) 古今和歌集の序等
- (5) 源氏物語
- (6) 枕草紙
- (7) 狭衣濱松中納言等
- (8) 大鏡榮花物語
- (9) 今昔物語

第四章 法中心時代の一 (鎌倉幕府時代)

概説

感情尊重の弊は、甚だしく意志を抑壓するにあり。意志を抑壓して、男猶女の如く、多くの軟骨、無腸の人物を出すにあり。これ、一の新主義なりといへども、眞の日本主義とは云ふべからず。前代以前に於ける感情は、未だ、特に、その意志を抑壓せず。おのづから調和の妙を示して、歴史の光華を發せしめたり。

前代の感情の尊重は、この點よりして、必ず大いなる反動を呈せざるべからず。果然、その末期よりして、地方の變亂に伴ふ武士の興起と共に、意志の尊重は生じ、感情の抑壓は起り、こゝに、前代以前を承

感情の抑壓

意志の文學

たる一面の日本主義、すなはち武士道は、現はれ來りぬ。しかして、勢家の權力の爭奪と相聯關して發達し、遂に、文學にまで波及して、當代及び當代以後の主なる作物の中心となれり。故に、前代の文學を、感情の文學とすれば、當代以後の文學は、自づから意志の文學と云ふべし。然れども、馴致の勢は、一時に減すべきにあらず。前時代の思想の纖麗優美、春華の一時に開くが如きもの、時移り、物變すといへども、多くの渴仰者のあるべきは自然なり。故に、猶感情の文學は、當代に到りても跡を絶たず。嘗に、當代のみならず、次々の時代に於いても、猶現はるゝこと少なからず、故に、此處に、自づから二様の文學を生せり。すなはち、一は、新文學にして、意志を重んじ、一は、舊文學にして、感情を重んずるものこれなり。前代の韻文に見えたる兩傾向は、一は、新、一は、舊なりきといへども、その根柢に於いては、依然として感情な

新文學
舊文學

新佛法

り。當代の一が意志にして、一が感情なるとは、大いなる差異あり。而して、意志を重んずるものは、自づから豪健、感情を重んずるは、自づから優美なり。豪健と優美と、一時に現はる。松と、櫻と、枝を交へ、柯を接するが如し。然れども、その新なるものは多くして、當時の中心をなし、舊なるものは少なくて、その點綴をなすに過ぎず。故に、その重んずべく、尊ぶべきは、新にあり、舊にあらず。

この文學上に於ける新文學と共に勃興せるは、精神界に於ける新佛法なり。武士の勢力を得來れると、戦亂の屢々起れると、また人心の簡素を喜びて、煩雜を厭ふに到れるとに應じて、簡單にして、學問的ならず、何等の教養無き人々の腦裡にも、直ちに了解せらるべく、また直ちに、安心立命を得べく、更に、儀式も、法式も、極めて簡便なるべき宗教の、在來の學問的、儀式的佛法に次いで起るは、當然の事なり。殊に、

淨土教は、人心に浸潤すること最も深く、諸行無常の念、および、これに次ぎたる欣求淨土の想は、精神界に洋溢したり。この思想は、忽ち文學に反映せり。祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色に、源平兩氏の、一盛一衰の理を示して、危然たる、しかも光輝ある散文は、細かに見れば、一の武士道的經典たると共に、また一大説教なり。しかも、前代を極力模倣せしもの、外は、諸種の文學、また、この範疇を脱出すること能はず。故に、すべてに於いて、當時に於ける新文學は、意志の文學たると共に、また佛法宣傳の文學なり。すなはち、純文學は、前代に滅びて、これよりして、傾向文學たらむとするなり。情中心時代は止みて、法中心時代は、こゝより發生せむとするなり。

前代に於いて、研究の中心なりし漢學は、國文の流行とともに、漸くその勢を減せりといへども、猶男子の、これに腐心せること、女子の、國

佛法宣傳の文學

漢文と國文との抱合

新日本文學の發生

堂上を下れる文學

文に刻苦せしが如し。末期に到るに従ひ、この兩者の區劃は、漢學の社會的必要を缺き來りしに連れて、次第に撤去せられ、和漢兩文は、相抱合して、こゝにまた、一新形體を生じたり。韻文に於いても、著しき漢語調と緊縮せる用語とは、よくこれを示せり。散文に於いては、こゝに甚だしく、時に、絢爛にして嚴正、たゞ四六文の書き下しの如き處あり。また優美にして高雅、前代盛時の風ある處あり。而して、兩者の、相混和し、融合して、剛柔、硬軟、各その宜しきを得るに到つて、その頂點に達せり。故に、法中心の文學は、また和漢混淆の文學と稱すべく、また男女調和の文學とも云ふべく、而して、新日本文學として尊重する價值あるべきものなり。

更にまた、これらの文學に従事せる主なるものは、時勢の變轉上、すでに公卿にあらず、また上流の女子にあらず。舊文學はこれあり。

新文學の主宰者は、當時の權力者たる武士なるべし。然れども、武士は、弓箭を弄すれども、文筆を弄する才を缺けるが故に、この權力は、一轉して、隱者、遁世者の手に歸せり。この點に於いて、文學は、既に堂上を下りて、士民の有となりたるを示すとともに、その寫すところは、公卿、大夫に薄くして、活躍せる武士に専らなり。或は時に、武士以下、奴隸、走卒の上にまで及ぶことあり。故に、こゝに現はるゝものは、上よりして下に及ぶ。その中心は、武士たりといへども、寫すところの範圍は、殆んど、日本人民全體を含めり。而して、これらの人物の活動するところ、たゞ京都附近のみに止まらず、國の北邊よりして、南端に及ぶ。人物に於いて廣きと共に、舞臺に於いても、また廣きことかくの如し。故に、日本語を代表せる新文學は、當時の日本人を代表し、更に、當時の全日本を代表す。而して、佛法中心思想は、當時の思想なるを

全日本の代
表國民文學の
發生

以てすれば、この新文學は、當時の日本全體の思想を代表したるものなり。當時の文學は、すでに、一局部の文學にあらずして、國民的性質を帯び來りたるもの、國民文學として推稱するも、誣言にあらず。故に、わが國民の文學史としては、この時代以後を研鑽すべく、以前の時代は、たゞ、この時代の序説として考ふべきなり。

第一節 韻文

一 内容

新舊二流の文學の、この時代に於いて劃然として對立せるは既に云ふところの如し。而して、その一意前代を襲ひて、形體に於いてはた内容に於いて、既定の範圍を脱せざるものは、特に韻文に於いて代表せるを見るなり。然れども、同時代に於いて出現し、同時代の人に於いては、兩流全く風馬牛なること能はず、必ずや、一脈相通する處なかるべからず。故に、仔細に見來れば、この舊流の文學を代表し、しかも韻文として、多大の進歩をなせりと認めらるゝ當代の初期及びその以後の韻文も、またおのづから、新傾向を有する他の文學、すなはち散文と、同一の趨勢を現はせるを見る。

新舊兩文學の連關

古文學の趣味の包括

韻文界兩派の統一は、前代の末期に於いて起り、鎌倉幕府の政治的統一と、殆んど同様の結果を呈せるを云へり。その流風引いて此の時代の初に及び、皇室の獎勵により、更に、政治的權能を失ひて閑暇を得たる朝臣によりて、多くの作家の輩出となり、統一的傾向はこゝに異常の發展をなせり。すなはち、前代の集大成は、その範圍を擴充して、當時の新文學の包括的なるを以て、その度を異にせりといへども、同様の徑路を取りて、當時に繼承し來れる、あらゆる古文學の趣味を網羅せむと務めたり。當時の短歌は、勿論、常に新なるべく、舊ならざるべく希望せること、前代末期の如くなるを以て、一層その新趣味を擴充しつゝ、舊趣味を統一す。故に、巧みなる客觀の描寫、新しき色彩の配合は、愈々出で、愈々多しといへども、猶舊趣味の如何なるものをも捨てず、たゞに、前代のみならず、前々代までに遡り、萬葉集中の歌も、ま

新舊趣味の統一

た屢々好資料となせり。この舊趣味の統一は、前代の末に於いて、既に見らるべき新傾向なりきといへども、これをして、猶數百歩を進ましめしものは、實に當時にあり。かく、博く、舊趣味を收拾せしのみならず、これを新趣味に混じて、光輝ある一團となせるもの、更に、當時の後世に向つて誇示すべきところなり。而して、これまた、當時の新傾向にして、舊文學の、新文學と相通するところならずんばあらず。

前代の韻文の主とするところは、感情にして、これの外、何物の侵入をも許さざるを理想とせり。當時に於いても、また、能くこれを繼承せるが、更に、步趨を進めて、たゞ自己一人のみならず、古來描寫せし各種の情緒を統一して、これを極端にまで走らしめたり。故に、哀別の苦戀愛の惱、生活の憂、流離の悲を述べて、悲痛の語、哀號の聲、愈々出て益々多し。而して、潸々たる紅涙、兩袖爲めに色を變ふと云ふに到

感情の極端なる表現

虚偽の型

意志

りては、眞に、その思ふところに超えたり。故に、この結果として、思想的に、一種の虚偽の型を製出し、その表現の巧妙なるところに、後世の崇拜を集め、模倣の甚だしきを致さしめたり。この中に於いて、才足らず、力足らずして、これに及ばざること遠く、全然、空疎なるものを出したりといへども、その影響するところ、甚大なるは否むべからず。かくの如しといへども、更に、これらに就きて、吾人は、一種前代と異なりたる趣味の存するを見る。そは、當代の韻文の含むところ、單に感情それのみとしては、猶足らざるところあり。その間に、多大の意志の潜めるを見る。すなはち、切迫的、決斷的語氣の存して、悠揚の間に、豪健の趣あり、優美の中に、敢爲の氣あること、これなり。これ、おのづから、當代の時代思想に影響せられしにあらずや。感情の範圍を離れて、むしろ意志の領域に侵入せるにあらずや。而して、また、當代の

幽玄の趣致

新文學の傾向と、一味相通するところあるにあらずや。

更に、當代の韻文の、前時代のそれと異なるところは、いはゆる幽玄の趣の深きにあり。幽玄は、前代の季に於いて、既に唱へられしところ、語を淺くし、意を深くし、しかして、從來の歌と、詩とより得來れる不可説の詩趣を發揮せむとするなり。この故に、當代の歌の佳なるものは、比較的解し易く、しかも、興趣洋溢して、餘韻縹緲たるものあり。かくの如きもの、當代の新文學に於いても、猶存し、時には、その骨子となれるところあり。故に、この點に於いても、舊文學は、また新文學と相通するところあるを見るなり。しかれども、その弊として、信屈の語、難解の句、相次いで出で、いはゆる達磨風なるものを生じ、その表面に於いて、意味の深遠なるが如く、しかして更に、熱情の制すべからざる風を装ふこととなれり。これまた、當代の新文學の難解の點多き

達磨風

と、傾向を同じくせり。

かく、その弊として指摘すべきもの一にして足らずといへども、當代の新しき韻文は、殆んど短歌としては、進歩すべき極點にまで達せり。ことに、前代、前々代の情趣を統一し、更に、當代の時代思想と連關して、一新體を作り出したるは、贊嘆に堪へざるところなり。然れども、これらは、皆この時代の初に屬す。その以後に到つては、たゞ、様に依つて葫蘆を畫けるのみ。才⁽¹⁾足らず、想及ばず。その影を逐ひ、跡を慕ふに過ぎず。しかも、模倣に重ぬるに模倣を以てし、一の創意なくして、套襲のみあり。その模範と、典型とを去ること、甚だしきものあるに到りしより、直ちに、その原流に遡り、更に、新趣を發せむとせし一派を生じて、他と烈しく反嚙せりといへども、要するに、猶模倣の範圍に止まれり。畢竟、短歌の理想的發展は、この時代の初にあ

反動により
派生せし一

りと云ふべし。

(1) 式子内親王、藤原定家、同家隆等

(2) 藤原爲家、同爲氏、同爲世等の諸作

(3) 藤原爲兼の一派

二形式

上述の如く、當代の短歌は、内容的に價值ありといへども、更に考ふるに、形式的方面に、却つて、一層注意すべきものあるが如し。從來幾百千の歌、いづれも苦心、焦慮の餘に出で、變化を窮極して、殆んど残すところなからむとす。故に、こゝに到つて、更に、一大變化を興へ、多少の非難を排しても、猶新内容と一致すべき新形式を用ゐむとするは、至難の業なり。然れども、窮すればまた通ず。時勢は、遂に從來殆ん

新形式

格調

ど見ざりし新形式を案出したり。格調よりして云はゞ、その一として、擧ぐべきは、句の切斷の多くなれることこれなり。その二は、説明語、及び助辭、助動詞の省略せられて、内容ある言語の、これに代りたることこれなり。然れども、この結果として、聲調切迫して、緩徐の態なく、従つて品位を缺けるものを生ぜり。これまた、當時の新文學と相通ずるところなり。その三は、最後の一句に、名詞を用ゐることなり。その四は、漢詩の聲調を模せることこれなり。これらによりて、句々勢力を生じ、優雅の間に、豪健の趣を存し、艶麗の中に、一種の生氣を含むことを得たり。然れども、これよりも、猶苦心の存せるは、修飾に在り。

譬喩

前時代の末に云へる、譬喩より出でて、緊縮せる一句を創始し、使用する、この時より多きはなし。これによりて、譬喩も生じ、含蓄も

加はれり。しかれども、難解もまたこゝに萌したり。序詞の使用の巧妙なるは、また逸すべからず。而して、その無意義なりしものを有意義となし、十分に、本義中に混入せしめたるに於いて、混雜を起したりといへども、猶その意味を擴充したるは多とすべし。縁語も、懸詞も、これに聯關して、愈々巧なり。然れども、更にこれらを超えて、當時の人士の意匠を疑したるは引喩なり。この引喩は、むしろ、古歌の利用と云ふを適當とすべし。その意を探るもの、その意を反駁するが如きもの、その主語を變換するもの、その語句を採りて、その意を擴張し、或は變改するもの、或は聯想を豊かにせむとするもの、これら、一部は内容に關し、一部は形式に關せりといへども、共に、引喩の巧妙なるものとして、賞賛せざるべからず。この結果として、一首にして二首の用をなし、時には、三首の用をなす。三十一音詩は、時に六十二音詩

となり、また九十三音詩となれり。然れども、かくの如きは、すでに、古文學の範圍に囚はれたるが致すところにして、生氣の潑刺たるものを缺けるは云ふを俟たず。「たゞ、古韻文が、こゝに統一せられて、比較的複雑なる形式を作為するに到りたるを知るべく、更に、一新意のありて、これを貫くを知るべし。而して、また、これらの舊文學が、新文學と相通すること多きを知るべし。

以上に於いて、韻文に關する大體を終へたり。然れども、これらの叙述の主とせるところは、この時代の初期に關す。この後⁽²⁾に於いては、既に云へるが如く、たゞ模倣あるのみ、而して墮落あるのみ。小變動⁽³⁾はありといへども、短歌の生命は、この時に盡きたるものと云ふべし。而して、これらの舊文學は、すべて、舊來の趣味を趁ひ、舊來の言語を使用せるもの、新興の文學とは、殆んど無關係なりと云へども、その

幽玄の興趣に富めるところ、統一的なるところ、意志的なるところ、更にこれを貫くに、一新意を以てしたるところ、内容と形式とを問はず、新文學と相關聯して忤ふところなし。眞に、時代の潮は流れて及ばざるところなく、浸して潤さるものなきを見るなり。

- (1) 式子内親王、藤原定家、同家隆等の諸作
- (2) 藤原爲家、同爲氏、同爲世等
- (3) 藤原爲兼等の新運動

第二節 散文

一 内容

當代の新舊兩様の文學に於いて、韻文は、その舊なるものを代表すると同時に、散文は、主として、その新なるものを代表す。而して、その舊なるものも、その新なるものと、脈絡相通せるものあるを云へり。然らば、その新なるものは、果して如何。以下述べむと欲するところは、すなはちこの説明に過ぎず。既に云へるが如く、前代末期の社會上の大變動は、武人の勃興を來し、感情よりも、意志を重んずる武士道の復興となれり。故に、新文學は、感情を重んぜずして、意志を重んず。而して感情の意志に敗ぶるるを寫すを主とす、舊思想、舊趣味の、新主義、新社會に對しては、殆んど何等の價なきを寫すを主とす。時に、多

意志の尊
重

武士の經典

くの優美、嫺雅の挿話あるは、感情の美しき半面の意志の醜き半面に對して、猶多くの價あるを示せり。然れども、猶進んで、これらは優勝者の黨すべきものにあらざるを描けり。故に、當時の新文學は、武士道の趣味ある、しかも價高き經典なりと云ふも、失當なりとせず。而して、この意志の尊重は、當代の舊文學すなはち韻文と、一味相通するところあるは、すでに云ふところの如し。

實に、武士道の發揮は、當時の散文の、主眼ともいふべきものなり。汗馬奔馳、亂箭雨注の間に於いて、名譽と家門との尊重を忘れず。君と臣と、相親睦し、融和して、一身となり、一體となりて行動するに到りて、わが固有の道徳は、初めて、十分の表現を見たり。この故に、時に、多少の風流韻事を混せりといへども、すべてに於いて、勇武豪健、果敢峻烈、前古未だ見ざるところのものを示せり。此の如きもの、後に到る

固有興味と支那趣味との統一

に従ひ、益々その度を加へ、いはゆる軍記物語は、漸次、たゞ、強者の強を寫すに止まり、殺伐にして無趣味なる軍談の書と變するに到れり。然れども、當時に於いては、未だこの弊竇に陥らず、含蓄多く、興味饒かにして、たゞに前古のみならず、また後世に向つて、誇示すべきものなり。かく、勇武豪健なるとともに、事件に變化多く、辭句に意義豊かなり。一衰亡、一退轉、事容易なるが如しと云へども、公卿大夫、一時に敗亡す。眞に、人間の一大悲劇なり。今日に在つても、なほ傷心の事に屬す。技巧を加へずして描寫すとも、背後にある或者は、直ちに人の胸奥を衝かむとす。ことに、これを寫すに、從來の固有興味と、支那趣味とを巧みに混和して、一大統一をなし、しかして、これによりて、連想を多くし、範圍を廣くす。一種、森奥、幽玄の念、油然として起り來るは、また自然の事なり。これ、既にいへる舊文學なる韻文と相通すると

新佛法思想

ころならずんばあらず。當時の新文學は、以上を外にして、猶大いなる根本思想の下に動けり。これ云ふまでもなく、當時の新佛法思想なり。前朝の儀式的佛法、學問的佛法は、當時の人心を満足するに足らずして、漸次衰頹し、簡易なる學術を外にしたる新佛法は、取つてその位地を得たり。而して、これに基因せる欣求淨土の念は、愈々甚だしく、これと共に、通佛法的觀念なる無常觀は、また益々熾となれり。故に、當時の文學者たる僧侶、隱者より觀れば、眼前の社會の大悲劇は、たゞ法をすゝむる方便なり、濁世解脱の因縁なり。故に、その記するところは、兵馬のこと、鬭争のことなりといへども、その眞精神は、彼れにありて、これにあらず。幾多の豪傑、勇士の一起一倒、皆多くの例話に過ぎず。眞に述べむとするところは、浮世の恃むべからず、淨土の求むべきに在り。故に、幾

舊散文と新散文の契合

多の物語、いふところは異なりといへども、歸するところは、一大説教なり。この結果として、幽奥の度は加はり、深遠の趣は添ひて、前古未曾有の國民的文學は、一層その美を擅にせり。當時の新散文、殊に、その主たるものに於いては、以上の如し。その以外に於けるものも、少異ありといへども、この範圍を出でず、たゞ、戦亂を寫さざるのみ。幽玄の趣味あるに於いては、また一なり。意志的傾向著しく、佛説を祖述するに力めたるも、また一なり。舊散文にあつては、前代の餘勢を趁へるのみ。多くを云ふ價なしといへども、そのすべてに於いて、著しく、當代の風を帯びたり。一意、前代を模して、その眞を疑ふものあり、といへども、猶前代末期の風を承け、趣向に墮して人情に遠ざかれり。しかして、すべてに於いて、佛法的思想に影響せらるゝより、教訓の色を帯び、または、神佛の化現を信じて、本地

物の前驅をなせるもありて、業に既に、前代のものにあらず、當時の色彩は、いかにしても剝落し得べからず。かくの如きもの、またすでに、韻文に云へるところと、その傾向を同じくせり。

- (1) 保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記
- (2) 東關記行海道記、十訓抄、古今著聞集等
- (3) 住吉物語
- (4) とりかへばや物語
- (5) 松浦宮物語

二 形式

新思想の下に興りし新文學は、また新形式を探らざるべからず。故に、當代の散文の形式的技巧の、注目に價すべきこと、猶韻文に云へ

新文體の發生

るが如し。吾人は、比較的多くの敘述をなさざるべからず。前代の末期に於いて、無技巧的描寫起り、純正なる國語も、漢語も、佛語も、俗語も、自由に混入せしめて、一種の包括的新文章をつくりたるは、既に云へり。而して、この時、また漢文の形式を用ゐて、その勁健雄拔の趣致を利用して、戦亂を寫すこと起れり。しかも、漢文驅使の力、漸次減少し、その顛倒の法、助辭の意、明らかならざるに及んで、遂に、これに假名を加へて直寫し、形式に於いては、全然日本文とするを便とするに到れり。この風、前の包括的傾向と一致し、融合し、遂に、こゝに、純然たる國文にもあらず、はた、漢文にもあらざる一新文體は、作られたり。この新形式は、當時の意志的、武強的、宗教的なる新思想と相一致するところあり。何となれば、簡明、潔淨、剛健、雄偉、而して、周匝にして、情味饒かに、雄麗にして、餘韻の長きは、新散文の特色にして、また

軍記物語

新思想と契合するところなればなり。故に、こゝに、この新思想は、直ちに、この新形式をとりて現はれ來れり。軍記物語は、すなはち、これの最なるものなり。かくの如きもの、前古未だ嘗てあらざるところ、吾人は、軍記物語に對して、特に、驚異の眼を以てこれを見る。

四六文體

奈良朝より前代にかけて、ことに流行せし漢文の形式は、四六文體なり。に於ける文選は、なほ詩に於ける白氏文集の如し。その聲調を用ひ、その形體を採り、その語句を踏襲し、模擬縱横、たゞ、その範圍を出でざらむとせり。この傾向は、漢文を操ること能はず、顛倒の法を解せず、助辭の意を失ふに到つても、猶存續し、而して、無技巧的、包括的國文と融合す。故に、その形體に於いては國文なり。些の顛倒もあらず、一の焉、哉、乎、也もあらず、純然たる日本文なり。然れども、讀過一番すれば、宛然たる漢文なり。句と句と相對立し、語と語と相反視

對偶の發達

し、故事は故事と併び、典故は典故と對し、嚴乎として、四六駢儷の文なり。壯重なるべく、森嚴なるべく、威儀あるべき處に於いて、ことに然り。而して、この對偶や、上古時代、または奈良朝時代に於ける對句と、その選を異にせり。すなはち、從來ありしところは、多くは反覆なり。その形體に於いては、相對立せりと云へども、その内容に在つては、ただ一意の反覆に過ぎず。前朝に及んで、大いに進歩したるものあり。猶一句、一節の中に於いて、劃然相對し、相反せるは、尠なし。然るに、時に於いては、大抵一句と一句と、一節と一節と、儼然として相對峙し、その間些の共通點あるを許さず。故に、讀過すれば、壯重なり、森嚴なり、緊縮して、情味甚だ多様なるを覺ゆ。然れども、強ひてこの形式を墨守したるより、その對偶なるべからず、又對偶とすべき好材料を缺ける時に在つては、贅句、贅語自づから出づ。而して、二に

國文脈

すべきを、強ひて二にし、三にし四にするに到つて、その本義は失墜せられて、遂に、前代の文の、一意到底に及ばざること、數十百歩なるに及べり。然れども、かくの如く、漢文脈を主としたるは、専ら、森嚴、壯重なるべきところなり。これに反して、優雅、典麗なるべき處に於いては、從來の國文脈を用ふ。哀別、離苦の悲を敘し、詩歌、管絃の樂を述ぶるに及んでは、佶屈の漢文脈は、その能くするところにあらず。流暢なるべき國文脈は、その長處を發揮すべし。故に、この際に在つては、前代の流風を趁ひたる聲調と、形體とは、直ちに、出で来る。然れども、その國文と云ふも、すでに、全然前代のものにあらず、多くの漢文脈ことに、四六文體を含みて、更に多くの對偶を作る。たゞ、故意に作製して、その本義の所在を不明ならしめざるところ、全く漢文脈を趁へるものと異なれり。

引喩

引喩の意義

對偶に次いで、四六文體に於いて、ことに著しきは、故事、典故を引用するの多きことなり。いはゆる、引喩の多用なり。この傾向は、既にわれに入ること深く、前代に於いて、甚だしく、その然るものあるを見たり。四六文的の漢文脈と、國文脈と、相抱合するに及んで、對偶と共に、この修飾の盛行、燎原の火の如し。一事、一語、出典なく、故事なくんに、止まざらむとす。而して、たゞ、一節、一句の文飾に止まらず、更に、事實の證明として、一條、一段を引用す。すなはち、彼れにもかくの如し。これのかくの如きと、その轍を一にす、記憶せざるべからず。更に、我れのかくの如きは、彼れのかくの如きと、符節を合するが如し。名將、傑士の流風、千歲猶欽仰すべしと云ふが如くす。然れども、これ、猶些末なり、これより更に、大いなるものあり。すなはち、因果應報の理、昭昭として、天日の如し、毫末も蔽ふべからず、匿すべからず、何れの國、何

引用の廣況

れの時に在つても、豪傑も、勇士も、忠臣も、美人も、その範疇より脱却すべからずと云ふなり。前代の引喩は、たゞ、趣味を増加し、餘韻を多くし、含蓄を裕かにするにあり。當時の引喩は、これらの外、更に、佛法的大教訓を加へたり。此の類當時に於いて、初めて出で來りしところにして、次の時代に於いて、その盛を極むるものなり。然れども、これより發する街學的臭味は、遂に脱すべからず。引用愈々多くして、臭味益々多く、嫌厭の情を起さしむること、一再ならず。たゞ、その引用するところ、漢は本より、佛にいたり、和に及び、散文も、韻文も、經典も、詩書も、苟も、前代より傳はり來りたる文學の精粹は、片言、隻句といへども、悉く採擇し來る。故に、猥雜の感ありといへども、當時の文を讀むは、猶從來の幾多の書を讀むが如し。一にして、すでに數千卷を兼ね、かくの如きもの、猶次の時代に於いて繼續せられ、舊文學一半の趣味

を作りたり。

漢文脈と國文脈と相異なるところは、句法の簡勁なるにあり。國文の、縷々として説き、諄々として述ぶるが如きは、彼れになきところなり。前代の末に於いて、無技巧的描寫の興ると、もに、此風また漸次興り來り、簡勁と流麗とは、次第に地を代ふるに到りしが、この時代において、主として單文を用ゐ、つとめて、重文、複文を用ゐず。故に、句々短く、語々強く、大抵贅語なくして簡明に、冗句なくして切實に、よく當時の武強的氣風と一致したり。日本文にして、眞に、勢力に富み、しかも周匝なるもの、當時の文に過ぐるはなし。上代の韻文的散文の質にして、文なきものとは、同日に論すべからず。然れども、猶情味の饒かに、哀音の長きものに於いては、處々、從來の重文、複文をも用ゐて、句を長くし、殆んど、前代の文に近きものあり。かく、諸體ありとい

へども、こは、たゞ形態の幾分のみ。その根本に於いては、遂に、當代の烙印を有せざるものあらず。

かく、漢文脈と、國文脈と相融和し、抱合せを以て、勢兩語の混合は起らざるべからず。故に、忽ちにして漢、忽ちにして和、剛柔、硬軟、混交、錯雜して、一見甚だ奇怪の感あるものあり。しかれども、大體に於いて、よく一致し、融和し、讀誦の際、一種の節奏をさへ起さしむるものあり。而して、猶これのみにあらず。教理を主としたる文として、佛語の混入は、頗る盛なり。時に或は、經文を、たゞ直寫したるが如きところあり。しかも、これらも、また大抵、國語と、漢語と一致して、その調和を失はざるを見る。翻つて考ふるに、當時の國語と云ふもの、既に前代のものにあらず。その範圍、甚だ擴充せられて、高雅も、卑俗も、悉く入る。特種の武士語も存し、一地方の用語も混じ、訛音も、轉音も、選ぶ

佛語の混入

言語の大統合

散文と韻文との統一

ところにあらず。苟も、當時用をなせるものは、用ゐて漏すことなし。故に、外國語に於いて、また内國語に於いて、大統一をなせる當時の如きは、前古未だ曾て有らざるところなり。

言語の統一、かくの如くなるとともに、從來の文學の二種類、すなはち散文と、韻文と、またこゝに調和せられむとせり。抑、從來の散文には、韻文素を混することなし。時に、聲調の類似はありといへども、作者の、特に意を存せし處にあらず。然るに、この時に到つては、散文中、突如として韻文あり。七五の聲調は、平叙の中に現はれ來る。この類は、勿論、情緒纏綿して、平叙にのみよりては、多くの語句を要し、或は、全く感興を殺がる、場合にあり。何物をも、直ちに七五調中に收めむとするにはあらず。然れども、散文と、韻文とは、こゝに接合したりしなり。これによりて、韻文にのみ得られたる節奏、及びそれに伴

ふ情趣は、遂に散文中のものとなるに及べり。

かく、當時の新散文は、多くの驚きを、吾人に與へたり。すなはち、新文章は、從來、相對立せし漢文と國文とを融合せしめたり。漢文は、男子、國文は、女子のものとしてせられたるを以て、新文章は、男女の兩文體を一致せしめたるなり。而して、これとともに、和、漢、佛の語を統一し、更に、方言たるを、俗言たるに拘らず、苟も、當時に生命を有せる言語は、悉く網羅せり。男女を問はず、上下を論せず。國民一般の言語を用ゆ。眞の日本國民一般の散文は、こゝに生じたるなり。しかも、和といはず、漢といはず、佛といはず、すべての文學の興味を綜合し、精粹を集成して、更に、一新興趣を發せしめたる所、恰も、一代の英雄が、撥亂、反正して、一大統一を企て、しかも成功したる感あり。

以上の如く、新散文は、國文の一新紀元を創始したると共に、舊傾向

結論

に従へるものも、また全然舊なること能はずして、多少の新味を帯びたり。然れども、舊に依らむとして、却つて、新に傾きたるは、模倣文學として、失敗せるものなり。而して、その用語も、前代以後のものあり、句法もまた、現代に傾きたるは、當時の韻文と合せて、大勢の止むを得ざるものあるを知らしむ。

概するに、當代の文學は、新時代の思潮に動かされて發生したるものにして、わが國文學に於ける廻旋期の産物として、最も注意すべし。ことに、前代を綜合し、上下、貴賤を混合し、從來の二潮流なる和と、漢とを混融し、更に、これによりて、武士道を表白し、新佛法の大理想を述べ來りたる所、前古未だ曾て有らざるところなり。その舊文學を模倣せるものも、またこれと脈絡相貫通し、一新興味を發し來り、ことに、短歌に於いて、その技巧、修飾の絶頂に達したるは、刮目して見るべし。

きものなり。然れども、大體に於いて、純文學の範圍を離れて、傾向文學の領域に入れり。國文學は、爾來、この桎梏を脱する能はず、遂に明治時代に及べるは、悲しむべき現象なりとす。

- (1) 將門記等
- (2) 保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記
- (3) 本朝文粹、續本朝文粹中の諸作
- (4) 住吉物語、とりかへばや物語、松浦宮物語等

第五章 法中心時代の二(室町幕府時代)

概説

前代に興起せし意志の尊重は、社會の大勢、猶武強的なるを以て、依然として、重きを當時になせり。然れども、武士的趣味の簡素質實は、時々の小康、ことに、室町幕府の確立を見ては、既に堪ふるところにあらず。感情の尊重、美の希求は、漸を逐うて發生し、稍々異なる意味に於いて、平安朝時代の如くならむとせり。一方に前代を繼承し、且つ當時に適合したる武強の氣風あり。又他方に、前代の新佛法の流布あり。それと、ともに、盛行せる禪的趣味あり。故に、この三傾向の交錯よりして、平安朝の優美、佳麗は、直ちに、當時の好尚として再

新趣味

深奥の詩趣

現せらるゝこと能はず。その光輝は藏され、その色彩は消されて、一見、素朴、質實、前代の如く、しかも、その底には、陸離たる光彩あり、津々たる雅味ある新趣味は現はれたり。これ、前代の文學の要素となれる幽玄の詩趣の、更に一步を進めたるものならずんばあらず。しかし、この新趣味は、文學の上にも波及して、時に、多くの矛盾を示し、混亂を起し、何等の統一も、調和もなきものを産せしめたりといへども、その間に於いて、往々、一道の深奥にして多岐なる詩趣の横流するあり。讀者をして、覺えず、幽妙不可説の境に彷徨せしめ、冥想的興味を發せしむ。この趣味は、傳承せられ、多くの年序を経て、今日に及びても、猶生命を有し、國民生活の上に、多くの影響を及ぼせり。

以上云ふところは、主として趣味に關す。その中心思想は、依然として、武強的なり、無技巧的、排文藝的なり。武事を重んじて、弓箭を事

中心思想

説教的態度

とし、文事を輕んじて、非職の才藝となすは、前代の如し。然れども、又前代に於いて、多くの思想的革命を惹起したる、當時の新佛法の思想は、この時に到りて、愈々盛なり。前代の文藝の半は、武士道の經典なると共に、また佛法の説教なりしを云へり。當時に於いても、猶かくの如きも、その説教的態度は、一層切實にして、必然的現象をも、佛の靈驗とし、偶然的事象をも、經典の功德として顯彰す。故に、英雄も、豪傑も、佛に頼らずんば、永く惡趣に墮すべく、草木、花卉も、また經に依らずんば、救濟せらるゝ期なしとす。更に進んではた、佛法的奇蹟を記載せる書を、朝夕誦讀して、猶善果、善報を得べしとし、一意、佛と、經との靈驗、功德を説く。これ、眞の佛法の教理は、幽奥にして、無學なる當時の流俗の解すること能はざるものなるを以て、説教も、また自づから一段階を下りて、極めて鄙近に、且つ適切ならざるべからざるに到り

しを以てなり。實に、佛法を中心とせる時代に於いて、かく甚だしく、且つ廣きものを見ず。下りてこゝに到る、必ず一廻轉の生ぜざるを得ず。次の時代に於ける儒道中心は、これの反動に外ならず。

前代に盛なりし統一的傾向は、又この時に及んで、一層の發展を示したり。すなはち、この時代に於いては、たゞに、文章の上のみならず、すべての藝術の上にも及び、從來の音樂、舞曲を打つて一九としたる新舞曲興り、こゝに、異常の光彩を發せり。これと共に、文章に於いても、又同傾向愈々盛にして、從來の文學の錦繡は、集まつて一節となり、一篇となり、更に一の新錦繡を造れり。然れども、當時は、既に技巧の時代にして、創作の時代にあらず。創作力は缺乏して、新意を出だすこと能はず。前代の國民的統一の意味ある新日本文章は、一變して理由なき接合、連絡なき接續となり、彼の錦繡の一片と、この綾羅の一

統一的傾向

補綴的傾向

片とを以て、新衣裳を作れるが如く、矛盾も、衝突も、顧慮するところにあらず。故に、統一は、こゝに補綴と變じて、多くの價值なく、たゞ、句々の變轉と、脚色の多様とを味ふのみとなれり。この變轉は、もと韻文より起りて散文に入りしもの、而して、よく當代の趣味の片影を現はせるものなり。

かくの如く、補綴的傾向起りて、何物も、古典的語句の多くを以て述べ盡くさむとするに及んでは、煩瑣、複雑、解者に、多少の學殖、ことに古典的素養を要す。然るに、前代より繼續して、當時の權力者なる武士は、到底、これが學習の餘暇と、趣味とを有せず。況んや、また、その權力の一部を獲來りし平民に於いてをや。故に、この傾向を脱却して、更に、何人も理解すべき當代の語を用ゐて、當時の思潮を吐露したる當代の文學、云ひ得べくんば、現代的文章の現出は、要求せられたり。こ

現代的傾向

亂世的思想

の要求に應じたるものは、先づ多く韻文に現はれ、また更に散文に現はれたり。これらの中、猶古典的傾向の甚だしきものありといへども、その主なるものは、全然、當時に執着して殆んど、一の死語を用ゐず、時代の思潮を發揮せり。これと共に、その趣味もまた一變して、既に、優美、佳麗を希はず。戦亂の間に養はれたる、一種の脱俗的氣風と、嘲笑的氣質とは、また幽奥深玄をも欲せず。滑稽を喜び、突梯を愛し、才氣の縦横を希ふ。而して、更に、社會の裏面と、人間の弱點とを描寫し、ことに、權力者の失敗と、無學とを曲盡して、以て、哄笑一番せむとす。かくの如きを以て、當時の平安朝の趣味と、前代趣味との統一は、時と共に一變して、現代的趣味、すなはち平民的趣味に轉移するに及べり。而して、次の時代に於ける平民文學興起の因をなせり。

此の時代は、年序頗る長しと雖ども、他の時代と比して、特に細別し

平民的趣味

當代の三區劃

て論ずる要を見ず。故に、概してこれを云ふといへども、猶便宜として區劃を立つること從來の如くす。すなはちその第一期は南北朝時代、第二期は室町幕府全盛時代、第三期は戰國時代とすること、普通云ふところの如し。

- (1) 謡曲
- (2) 御伽草子
- (3) 狂言、俳諧連歌
- (4) 御伽草子

第一節 韻文

一 内容

前代の韻文は、相對立せる二様の文學に於いて、舊系統の主たるものなりき。而して、多くの新趣味、新傾向を示し、短歌として、殆んど發達の極致に達したりといへども、猶眞の時代思想とは、たゞ幾分かの接觸をなせるに過ぎざりき。この情態は持續せられて、この時代に入れり。然れども、古典的知識の屢々の戰亂に伴ひて、漸次亡失せしを以て、當時は、⁽¹⁾すでに完全に、その跡を追ふこと能はず、況んや、超越すること猶一步なるに於いてをや。故に、短歌の一體は、こゝに思想的に、衰亡に歸せり。

統一的傾向の發展

短歌の失落

すでに云へるが如く、統一的傾向の流傳、前代に於いて著しく、散文

變轉的趣味

は、その影響を被ること早く、新日本文を形成して、多くの効果を收めたり。この傾向は、遂にこれに止まらず、この時期に到つて、連歌の一體を發達せしめて、その綜合的趣味を宣揚せしめたり。抑も、短歌の貴紳の消閑の具となれること、すでに久し。而して、各人たゞ一首を賦して、輸贏を決するが如きは、多少の進歩を示したるものなりといへども、業に既に陳なり。必ずや、一新機軸の、この單調を破るものなるべからず。この故に、平安朝時代の末期よりして、徐々に、兩人相共に試作する風盛となれり。これすなはち連歌なり。この風、漸次發展して、前代よりしてこの時代⁽²⁾に及びて、第一の者、一句を出し、第二の者またこれに繼ぐ、第三の者、第四の者、順次これに繼ぎ、句々相繼ぎて、連珠の狀をなすに到りて、無數の變轉その間に起り、雲行き、水流れ、月没し、日出づる趣あり。これ、多人數にして、一大歌謠を作るものに

して、古來嘗てあらざるところなり。これを全體として見れば、猶散漫の嫌あり、一致を缺けりといへども、價値は、變轉の妙云ふべからざるにあり。而して、春風秋月の情備はらざるなく、神祇釋教、戀、無常、收められざるなく、綜合的、包括的なるところ、全然、前代の新散文と趣を一にす、たゞ、その現出すること、僅に一步後れたるのみ。これによりて、從來の短歌は、勢を失ひ、花下月夕、催さるゝところは、主として、この連歌なり。戰陣の間に於いても、猶連歌師は伴はれ、五十韻、百韻は催さる。第二期以後に及びては、學者も、無學者も、益々これに熱中したるを以て、連歌は、遂に短歌に代りて、覇を文壇に唱ふるに到れり。故に、この時代は、既に連歌の時代なり。短歌は、たゞ形式的に流行して、殘骸を一隅に留むるに過ぎず。

兩傾向の進展

この統一的傾向と、變轉的趣味との流傳は、更に一步を進めて、こゝ

補綴的傾向

に、謠曲を出だせり。謠曲は、新猿樂に伴ひたる新韻文なるを以て、新時代思想に伴ひて、從來の文學の精粹を集成し、更に、その趣味をも包含す。而して、舞曲は、變化を重んじ、單純を厭ふを以て、一曲の中、叙述の變化縱横にして、忽ちかれを説き、忽ちこれを述べ、一處に執着して、極點まで描寫せむとはせず。たゞ、肯綮に當るべき語を精選して、蜻蜓の水に點するが如く、説述し來る。故に、この弊として、多くの厭ふべき補綴的傾向を現出したりといへども、そはむしろ、主として形式に關す。かくの如くして、後れたる韻文は、漸く時代と步趨を一にするに到りたり。

幽閑的趣味

更に、此の新韻文の、極力説述せむとするは、優美、佳麗にあること、殆んど平安朝時代の如し。然れども、武强的氣風の存在と、佛教的趣味の流行とは、その光輝を藏し、精彩を潜ましめて、一種の幽閑的趣味を

發せしめたり。故に、その外面的表現は、甚だ絢爛なりといへども、その人心に印象するところは、閑寂なり、寂寥なり。前時代に現はれたるたる幽玄の妙は、却つて、真にこゝに到つて味ふべし。すなはち、當代は、前時代に創始したるものを大成せりと云ふべし。然れども、如上の趣味は、主として、その源を古典に發す。故に、多少の古典的素養あるにあらずんば、これを理解し、玩賞すること能はず。然るに、既に云へるが如く、時には幾多の變あり、人には干戈の煩あり。壯者は戰場に在り、庶民は負擔して立つ、古典的修養は、いづれの日に加ふべき。加ふるに、古典籍の、兵火の中に灰燼となるもの、益々多きに於いてをや。故に、第二期以後に到りては、古典的趣味は、大體に於いて、一般の理解する所とならず。無學者の多數は、遂に、一種の非古典的趣味を翹望するに到れり。非古典趣味は、即ち時代的趣味、云ひ

非古典的趣味

現代的趣味

佛法思想

得べくんば現代的趣味なり。出典を求めず、統一を顧みず、閑寂を喜ばず、幽玄を希はず、世相の裏面を見て、嘲罵、刺笑、滑稽、突梯、好んで人の意表に出づるは、亂離の間にありて、鋭く利かれ、強く剝がれたる時代的性情なり。この性情の發揮によつて出でたるものは、すなはち、狂言と、俳諧連歌となり。此の風、時と共に進みて、次の時代に入りては、平民文學の要素となれり。かくの如く、時の前後よりて、多少の變化はありといへども、當時を貫きて、多くの効果を示したる佛法思想は、蔽はるべくもあらず。佛の加護、經の功德は、殆んど、如何なる韻文にも現はれざる事なく、就中、謠曲最も甚だし。新猿樂は、その最初に於いては、神前の樂なりしを以て、佛法思想、猶鮮少なりしが、發達するに従つて、種々の過去の事蹟を演じ、更に、現在に及ぶに到りて、全篇皆佛の功德、一曲悉く惡靈の解

經典の功德

脱となれり。幽靈能と稱すべき複式能の現はるゝに及んで、殊に盛なり。猛將、勇士も、僧侶の供養にあらずんば、解脱すること能はず、妙典の讀誦を聞かずんば、成佛すべからず。生前の功業も、名譽も、勇氣も、權勢も、死後何等の効果もなし、却つて、諸國一見の僧侶によりて、漸く、九品蓮臺に上るを得るなり。而して、偉大なる經典の力は、更に人のみならず、草木、國土、一切をして成佛せしめずんば止まざらむとす。故に、花木の類をも、相率ゐて成道せしめて、漏すところなし。又更に、過去の人をして、幸福ならしむるのみならず、嫠婦をして舊夫、孤兒をして慈母を得しめて、現代人をして、またその絶大の利益に浴せしめむとす。かく、歴史的事實より轉じて、現代的事實に到ると共に、その解脱は變じて、眼前の利益となり來れり。すなはち、深遠なる教理は、淺薄、卑近となり、俗衆を喜すべく低下し來りしなり。これ、この類の

現代の利益

極端まで進める佛法文學

散文に於いて、殊に著しといへども、韻文に於ても、亦甚だ盛なり。狂言は、詆笑、諷刺を主とし、社會の裏面と、矛盾とを暴露すといへども、ただ、僧侶の無學、山伏の不術を刺るのみ。學識あるべく、威嚴あるべきものにして、そのいづれをも有せざるを笑ふなり。然れども、未だ佛陀を加護なしと罵り、經典を利益なしと嘲り、更に、その教旨を迂遠として、無用視したるものを見ず。故に、すべてを舉げて佛法文學なり。佛法を大中心として、その周圍に廻旋せし文學なり。かく極端まで進めば、更に、一轉廻せざるべからず。ことに、第二期頃に於いて、儒道の新研究發生し、僧侶の専らこれに従事するあり、遂にその手よりして、中軸の廻旋は起り、佛法文學は一轉して、次の時代に於いて、儒道文學となるに及べり。佛法文學は、僧侶の手によりて起り、また、僧侶の手によつて終らむとするなり。

- (1) 宗良親王、頼阿、正徹、藤原實隆等の諸作
- (2) 教濟、二條良基、宗朝、心敬、兼載、宗祇等の諸作
- (3) 山崎宗鑑、荒木田守武の諸作
- (4) 五山の僧侶等

6/28

二 形式

從來韻文と呼び來りしもの、殆んど短歌の一種に限れり。この時代に入りては、短歌は、思想的に衰亡し、却つて、連歌は隆盛となり、謠曲は完成し、その勢は、引いて狂言の現出にまで及べり。狂言は、韻文素少なきを以て、或は、韻文に算入する資格なしといへども、猶形式に於いて、大抵謠曲の套襲なり。これを附説する恐らくは妨げじ。故に、以後云ふところの韻文は、自づから、以上の三種を含めり。既に云へるが如く、前代以來の統一的傾向は、一層進展して到らざ

種類の増加

形式の膨脹

るところなく、及ばざるところなし。これによりて、わが韻文は、初めて、内容のみならず、形式の膨脹を來したり。連歌は、その最初に在りては、たゞ一方が、五、七、五の一句を云ひ、他方が、五、七、七の一句を唱へて、一種の短歌を形成せしのみなりき、然るに、一朝にして、相連接するこゝと長城の如く、五十句、百句の長さに達し、散漫として、一意の貫通せるものなしといへども、猶一大長篇を作り出でたるは、短歌全盛時代の人の、夢想だもする能はざりしところなり。然して、かく句々連接するに於いて、第一句と第二句と、意に於いて全然相密著せず、更に、他の第三句をして、第二句と連絡するを得べく、一種の餘裕を存せしむ。この餘裕あるところ、すなはち、連歌の意義あるところにして、變化の百出し、波瀾の洶湧する、皆これより發す。然れども、こゝに規則は生じ、法式は出で、格に入つて動かさず、法に従つて生氣なく、遂に第三期に

到りて、俳諧連歌興起の因をなせり。

かく連歌は、短歌に比して、長大の形式を採れりといへども、細別すれば、畢竟、同形式の反覆のみ。意は變轉すれども、形はたゞ五、七、五と、五、七、七との二種の繰返のみ。全體に於いて、從來の短歌の範圍内に踰踏せるものなり。統一的傾向は、たゞかくの如くにして止むべしむや。第二期に於いては、遂に、散文素をも併せて、更に、一新韻文を作り出でたり。謠曲は、すなはちこれなり。謠曲は、その一部に於いては、全然韻文にして、從來の短歌の相連接せるものを用ゐ、他の一部に在つては、散文的にして、平叙の中、多少の韻文素あるものを取る。前後錯綜、縱橫交雜して、變化の自由なるを愛し、情趣の轉化するを喜ぶ。しかも、全體に於いて、統一あり、調和あれば、連歌の趣味は、こゝに到つて、更に一步を進めたり。しかして、その形體も、連歌の單一よりして、

統一的傾向
の進展

形式の自由

漸次複雑に及び、前後對照して、互に、その光彩を發揮して、妙愈々妙なり。殊に、古英雄、美人の幽靈を點じ來りて、さきの樵夫、漁翁と相對せしむるに及んで、全體自づから二段となり、趣向の奇、構想の巧に、驚かしむるものあり。この風、次の時代の散文に入りて、いはゆる拍案驚奇の妙を擅にし、技巧的文學の極點に達せしめたり。かく、形體の長大となり、複雑に赴きたると共に、散文素の混入益々多きを加へ、純正の韻文にして、時代的思想と合したるものは、この時よりして、殆んど見ること能はざらむとせり。思想に伴へる、形式の自由は、この時よりして起れり。而して、韻文素の多きところは、從來の短歌に用ゐ來れる縁語、懸詞を用ゐること甚だしく、一意を終へずして、直ちに他意に移る。これによりて、連歌的變轉の趣味を專にせり。これと共に、統一的傾向は、從來の文學の精粹を取り來り、錦繡の文字、金玉の語

句をして、煥然として相映發せしめたり。たゞ一句と一句と意味なくして接合し、一語と一語と關係なくして連絡す。而して、ある一事を擧ぐれば、それに關する古句、古歌を、雜然として列陳し來る。故に、蕪雜、粗笨、しかも煩縲に過ぎて、調和の妙なく、矛盾の失あり。統一的傾向は、こゝに補綴的傾向に一變せり。然れども、全體に於いて、形式は自由なり、拘束せらるゝ處なし。かゝる韻文は、我れに於いて、初めてここにこれを見る。

形式の自由は、更に狂言を出だしたり。狂言は、全體の形式に於いて、謠曲に據れりといへども、新たに起りたる非古典的主義よりして、殆んど全く散文的となり、用語を、全然當代に取り、一切の死語を排して、生氣ある平民的思想を發揮したり。從來、平安朝の諸文學、皆生語を用ひ、勉めて舊文學に據らざらむとせり。これ、生々たる時代的思想

生語の使用

現代的傾向の進展

想を發揮せむと企てたればなり。その以後に到りては、その意氣を失し、過去を崇拜して、現代を重んずること薄く、古典的趣味を以て、全體を蔽はむとせり。然るに、當時の平民的氣風は、この形式の自由となれると共に、現出し來り、古語を逐ひ、古修飾を逐ひ、赤裸々に、生語によりて、當時代の思想を發揮せむとせるなり。故に、狂言に於いて、吾人は、初めて當代の人を見、更に、當時の眞を見ることを得。詆罵、刺笑を以て、抛却する勿れ、當時の眞價は、その間に存するなり。而して、この現代の尊重は、次の時代に入りて、多くの平民文學を起し、平安朝以後に於ける、わが國文學の黄金時代を起さしめたり。

この傾向は、引いて連歌にも及びて、俳諧體を起したり。從來の連歌の基づくところは、機智の利用にあり。一を以つて一に接す、一種の機智なり。而して、その用ゐるところの語句は、自由ならむことを

欲したるより、多少の生語をも許して、才氣の潑刺に任せたり。然るに、時を経るに及びて、漸次古典的に傾き、その用語も、格調も、短歌の範圍を出でず、その機智の利用も、漸次減少して、たゞ殆んど合作したる短歌に止まれり。而して、格式生じ、規則定まるに及んで、遂に、生々の氣を失して、全く古典的となれり。かくの如きもの、豈に、當時の新思想の飽くところならむや。故に、こゝに死語を棄て、廢語を顧みず、一意、生語によりて、感ずる儘を云ひ、思ふ儘を歌ひたるものを生せり。しかも、縁語や、懸詞や、共に露骨なる時代思想を修飾する所以なるを以て、用ゐること短歌の如しといへども、その全體より見れば、滑稽突梯なり、興言、利口なり。故に、特に、俳諧の二字を冠せりといへども、猶時代思想の發露たるは、明白なる事實なり。これ狂言と、全然、根柢を一にせるもの、乃ち、狂言とともに、時代的新思想を露はしたる二種の

俳諧連歌と
狂言との
一致

形體なり。故に、謠曲と、連歌とを以て、當時代前半期の思想を代表するものとせば、狂言と、俳諧連歌とは、後半期の思想を代表するものと云ふべし。用語の新舊は、思想の變化を表はし、思想の變化は、時代の推移を表はす。古典主義の現代主義に變じ、貴族趣味の平民趣味に變ずる、昭々として明らかなるものあり。

(1) 敦濟、二條良基、宗朝、心敬、兼載、宗祇等の諸作

(2) 山崎宗鑑、荒木田守武の諸作

第二節 散文

一 内容

前代の統一的傾向の、この時に到りて益々盛なるは、すでに述べたるところの如し。その著しきものは、韻文に於いて明らかなりといへども、猶散文の自由なる形式により、縦横描寫せるところに就いて、更に、一層切實なるを見る。蓋し、當時の傾向は、根柢に於いて、平安朝と相通すといへども、時と共に盛となれる武強的氣風と、益々弘通せし新佛法的趣味とは、これを牽制して、その勢を擅にせしめず。相混交し、雜糅して健實にして華麗、然も一種の陰鬱の色彩ある新趣味を造らしめたり。この故に、前代を繼承せし新散文は、軍記物語として、この交錯を以て、一種の錦繡を織り出せり。男女の情話、短歌の贈答、

新趣味の發揮

佛法思想

花月の夜の管絃等は、悉く、平安朝的の情的趣味の旺盛せるを見る。馬上の搏撃、遠矢の競射、亂箭の下の奮闘等は、悉く、前代の武強的氣風の潑刺たるを示せり。更に、軍陣中の經文の讀誦、尊貴の難行、術者の競争等は、悉く、佛法趣味の影響の甚だしきを現はせり。而して、これらの事件、これらの情趣相交互して出で、紛亂、錯雜、毫も統一せざることなし。故に、前代の軍記の如く、敵と、味方とを問はず、多大の同情を喚起して、暗涙を催さしむるものあらず。然れども、稍々仔細に看來れば、これらの間を貫いて、佛法思想の一條の大潮流、滔々して奔騰するを見る。佛法思想は、前代に於いても盛にして、一篇悉く佛者の説教の如くなりしが、當時は、更にこれに一步を進めたり。人生の無常迅速、露の如く、電の如く、風前の塵の如きを説くは、前代既にあるとこそ、當時もまた、戰塵空を蔽ひ、干戈寧日なきを以て、これを説くこと殊

に詳なり。然れども、當時は、これを以て満足せず。進んで、當時の世態を説きてこれが解釋をなせり。すなはち、宮方は頻に、武家方に敗られ、君にして正義あるもの、窮山に蹙り、臣にして不義なるもの、花洛に跋扈す、子は親を殺し、下は上を凌ぎ、天地反覆し、日月地に落つるが如し。世間、豈かくの如き變態あらむや。これを、今世一世に於いて見れば、事甚だ奇なり。然れども、物必ず由來する處あり。果ある處、必ず因あり。前に惡因あつて、而して後に惡果あり。決して、何等の前提なくして、偶然に結論あるにあらず。諸種の變態も、事皆前世に關る。前世の果を、今世に結ぶに過ぎざるなり。故に、その果にして熟し了らずんば、到底社會は、常態に復し得べきにあらず、臣の臣たらざる、子の子たらざる、真因はこゝに存せりと云ふ。これ、前代に於いて未だ言及せざりし處、此の時に於いて、始めて説破せられたるもの

因果律の説

非國家的

なり。更にまた、幾多の忠臣、孝子、苦忠を守り、苦節を持し、しかも、身死して葬られず、幽魂、亡靈相對して哭するは、甚だしき變態なり。かくの如きもの、また惡因の生せる惡果に外ならず。日夜闘争し、搏撃して、家を焼き、人を殺すこと無數、しかも、死に臨みて毛髮堅立し、七生猶復仇を誓ふに到つては、妄執の甚だしきもの、到底、善果を得べからず、相牽ひて修羅に墮し、惡趣に陥りて、また出づ可からずと云ふ。これまた、前代に於いて、言及せざりしところなり。故に、當代は、前代に比して、思想的に深酷にして、且つ透徹せり。然れども、遂に、餘りに宗教的にして、既に國家的ならず。上下の大義、君臣の大節に關しては、多く顧慮するところあらず。しかも、これらの散文は、英雄豪傑の惡趣に墮するを描きて、救濟せらるゝを描かず。これ、謠曲に云へる處に比して、一階を下れるものなりといへども、佛法の大説教としては、成

虚無思想

功せるものにあらずや。

これらの思想は、更に老莊の虚無思想をも交ふるに到りて、益々深遠なり。月花の美、男女の愛、和歌管絃の故實に、武士的説話を加へ、道徳を加へ、悟道を加ふ。半は俗の如く、半は僧の如し。かく、混亂、錯雜せる間に、浮世は憑むべからずと云ふに、理想は存せり。花の開く、月の澄む、人の相思ひ、相執する、畢竟假象のみ、眞は大悟に在り、徹底に在り。生不生は一條なりと云ふに在り。すなはち、既に、區々たる因果の關係に纏はさるべきにあらずと云ふに在り。かくして、佛法の大説教は、世俗、鄙近を離れて、高遠、幽妙の境にまで進みしなり。これ、前者に比して進むこと數十百歩、更に前代に比して、日を同じうして語るべからざるものなり。而して、またこれらの散文に貫流する一派の趣味は、既に辭句のそれの如く、絢爛にあらず、華麗にあらず、幽寂に

半俗半僧

幽寂沈鬱

あり、陰鬱にあり。殊に、半俗半僧主義のものに到りては、一見甚だ枯淡、乾燥なりといへども、讀者を、その内面に溢る、幽寂、沈鬱の流に投せずんば止まざらむとす。

思想交雜の妙は、第一期に極まれり。故に、第二期に及んでは、こゝに一廻轉あらざるべからず。すなはち、從來全體を被ひし古典主義は、漸次廢れて、現代的傾向は、取次に興起し來れり。當時の亂離の間に起りたる刻薄、恰惻、社會事物の裏面を洞察して、放笑せむとする現代的思潮は、幾多の狂言を作れると同じく、多くの擬合戰記を出したり。然れども、その結構、いまだ古典的にして、當時の人情、世態の潑刺たらざるは、狂言に比して、劣ること甚だし。而して、更に、當時の古典主義文學に通有なる術學的態度は、こゝに於いて愈々盛にして、却つて新しき非古典主義の出現を豫想せしむるものあり。而して、現代

佛法的教訓
の低落

的傾向の増加と共に、個人的價值も又増加し來りて、個人を中心とせる傳記小説は出でたり。その結構は猶古典的なりといへども、その思想に於いては、既に前期のものにあらず。かく、現代的傾向の汪溢し來れると共に、佛法的教訓も、またその内容を變じ來れり。當時の多數は無學なるを以て、深遠、幽妙、前期の如きものは、遂に俚耳に入ること能はず。すなはち、説くに現代的利益を以てし、金錢も、美人も、官位も、財寶も、皆佛徳によつて得らるべし、たゞ、これのみにあらず、侏儒も常人となり、乞丐も公卿となり、絶大の災厄も免かるゝを得るなり。實に、佛陀の力の無限なるは、未來と云はず、過去と云はず、たゞ現世にあり。故に、何人も、佛に歸依し、佛を尊信せざるべからず。その歸依、尊信は、遂に、人その者を上して、直ちに佛とならしむることを得べし。死して後、某の觀音、某の菩薩として現はれ、更に、諸人の歸依と、尊信と

を得べしと云ふなり。この現世的なる處、謠曲に反して、却つて平安朝と似たりといへども、利益と、加護とを、誇張して描寫するに於いて、大いに鄙近なり。佛及び經の功徳、かくの如く盛なるを極力描寫したる幾多の童話は、繼續して第三期にも及び、一面説教の墮落を示して、更に、次の時代の小説の前提をなせり。

かくの如く、古典主義の時と共に、現代主義に廻旋し、移動する處、次の時代の序説として、甚だ興味あり。しかもまた、公卿文學が、僧侶文學となり、而して、平民文學に變換するを説明して、意義あるを見る。

(1) 太平記

(2) 徒然草

(3) 精進魚類物語、鴉鷺合戰物語

(4) 曾我物語、義經記

(5) 御伽草子

第五章 法中心時代(二)

二 形式

向統一の傾向
補綴的傾向

前代の新散文は、この時代に到りて、愈々進展し、形式的方面に於いても、その利と弊と、極點にまで達するに到れり。前代の新散文は、統一主義の上に立てるを以て、この時代は、またこれを繼承したり。故に、當代の初よりして、美辭、佳句は、如何なる種類といへども、收拾せずんば止ざらむとす。現代を宗とする傾向未だ現はれざれば、世はただ、この主義の跳梁に任せたり。辭句の絢爛、華麗は、益々その度を加へて、光彩陸離、珠玉を連結し、錦繡を合綴するが如く、美文學として、上乘なるかの觀あり。然れども、たい連結なり、合綴なり、美は美なりといへども、適度を過して、調和を缺き、順序を失ひ、遂に、全體に涉りて、何等の統一をも求むべからず。これ、第二期に於ける謠曲と、全くその

趣を一にするものにして、當時は、實に、補綴的傾向の頂點に上りし時代なりしなり。

前代に云へる對偶は、これらの補綴と共に、次第に多きを加へ、一事を云へば、必ず他事を云ひ、相互に映發し、反襯せしめ、殆んど、一氣にその眞意を披瀝することなし。故に、描寫の法甚だ煩雜にして、屈曲し、線繞し、委曲を盡くせるが如くにして、しかも、眞意は容易に捕捉すべからざるを致せり。而して、これと伴へる引喩は、甚だ多く、辭句は、一典故あり、出處ありて、苟且ならず。殊に、これらをも、双々相對比せしめて、對偶の妙を盡くせり。この風は引いて、前代よりも、盛に事實に及び、支那にかくあり、印度にかくあり、本邦に於いてかくの如きは、類推の結果、自づから當然なるべしと云ふが如くす。また、佛者もかく云へり、古聖もかく云へり、故に、本邦の人もかくせざるべからずと

對偶

引喩

云ふが如くす。すべて、古今東西に涉りて事實的證明をなし、因果の數自然に明らかなるを思はしめ、而して、これら相對して、双關の勢をなし、孤立に陥るを得ざらしめたり。これらの結果として、漢佛の語の分量、比較的多きを致し、これらに通曉せずんば、解し難く、讀み難き處また尠からず。而して、これと共に、術學的傾向は著しく増加し、筆を弄し、文を飾りて、自己の學識の超凡なるを示さむとす。これまた、全く謠曲と一致せるものなり。たゞ、これの第一期に出でたると、彼れの第二期に出でたると、これの散文的なると、彼れの韻文的なると、異なるのみ。加ふるに、謠曲は、舞臺上の制限ありて、その形式比較的、に短けれども、散文は、何等の拘束なきを以て、縦横に故事を引き、成語を引き、遂に引いて、一章、一段なるに及んで、煩穢の感厭ふべきものあり。猶彼れと我れと、國情を異にし、風習を一にせざるを以て、その

謠曲との一致

韻文と散文との合致

暗合せる故事も、徹頭徹尾同一なること能はず。しかも、これを云ふこと精細なるを以て、矛盾は生じ、衝突は起り、遂に、何の意を以て、かく縷々たるかを訝からしむるものあり。

統一的傾向の進展は、また、韻文をも、散文に合せしめむとせり。前代に於いても、この傾向は、處々に散見したりといへども、當時の如く、盛なること能はず。軍記に在つて、散文として讀み來りしもの、突如として韻文に入るは、謠曲に於いて、韻文として見來りしもの、倏忽にして散文に入ると、正に相反せり。然れども、情緒の弛張如何に關して、或は制約を緩くして文となり、或は聲調を強くして歌となる、變化の縦横自在なるところ、當時に於いて、最も見るべし。これ、實に形式の自由に基因する、從來の二形式の統一にして、又發展なりと云ふべし。然れども、その韻文素に用ゐる修飾は、從來短歌に用ゐる來れ

平安朝模倣
の不能

るところの縁語、懸詞の類にして、一意を終へずして、他意に移る、變轉自在なるところ、全然連歌的趣味にして、しかも、また諸曲的趣味なり。かく、形式の發展せるとともに、平安朝時代の模倣は、全く、不能となり。一、意平安朝を模倣せむとするものも、また漸く前代に落ちたり。しかも、引喩多く、術學的傾向の多きは、遂に、當代のものたるを證せずんば止まざらむとす。一時代に生じて、その時代の臭味を脱却せむとするは、實に難しと云ふべし。

第一期以後に於いても、如上の風は、依然として持續せり。美辭、佳句の補綴は、益々盛に、無學者の増加すると共に、引喩は、教訓的意味を帯びて、愈々多し。而して、諄々として述べ去り述べ來つて、遂に、その歸趨を忘れたるものあり。かくの如きは、實に、第一期よりも下れりと云ふべし。歌謠の聲調も出づること多く、形式益々自由に、生語の

生語

現代的傾向
の熾盛

混入漸次盛にして、用語は、従つて豊富なり。誇張の風は、また著しく、小を轉じて大となす結果、當時の亂世的氣質と合して、擬合戰記(4)を作爲せり。しかれども、一方に於いて、古典的趨勢は、漸次薄弱となり、個人的傳記の起るに及んでは、生語愈々多し。御伽草子に到つては、従来の文法も無視せられたり。しかしして、舊來の如く、出所の正確なる故事は取ること能はず。唯、當時傳稱せられたる俗間傳説を集録するのみ。また、美辭、佳句は知ること少なきを以て、補綴をもなすこと能はず。たゞ、意の趨く處によつて、描寫するのみ。これ、古典的趣味より見れば、非常なる墮落なりといへども、その反面には、現代的傾向の鬱勃たるを現はせり。現代の思想は、生語に依つて表はすべく、死語に依るべきにあらず、更に、又、從來の辭句、典故に依るべきにあらず。當代末期の文學、すべて、現代と、自己とを主として、過去と、古人とを主

とせざるは、偶然の結果なりといへども、後來大發展をなせる平民文學に基礎を與へたるものとして、多大の價值あり。而して、韻文に於ける狂言と合して、文學の遂に上流を離れて、下流に移動せるを示せり。而して、また、從來の散文中にありし韻文素は、その多きを致して、吟誦用のものとなり、遂に、次期に到つて韻文の主なるもの、すなはち淨瑠璃を形成せり。故に、當代の文學は、次の時代の先驅者として、輕に看過すべからざるなり。

要するに、大中心たる佛法的思想の發揮、漸次その究極に達して、遂に一轉換をなすべき形勢となり、また前代を承けたる統一的傾向の進展、その頂點を極めて、一度、補綴的傾向に落ち、二度、現代的傾向に移り、而して新しき發達をなさむとする時機に達したるもの、當代文學推移の大體なり。かくの如きもの、如何に變化し、發展せむとするか。

結論

吾人は、次の時代に急がざるべからず。

- (1) 太平記
- (2) 徒然草
- (3) 精進魚類物語、鴉合戰物語
- (4) 曾我物語、義經記
- (5) 十二段草子

第六章 道中心時代（江戸幕府時代）

概説

平民の時代

公卿の時代は、一轉して僧侶、隱者の時代となれり。而して、再轉して、こゝに、平民の時代は來れり。これ、前代の末期に於いて、既にその兆候を現はしたるが、その、十分に發達し、完成したるは、此の時代の事に屬す。勿論、此の時代の政治上の權力者は、前代と同じく武士にして、平民は殆んど與らず。殊に、幕府の施設、その宜しきを得たるを以て、政治的地位は一層確立して、牢乎として、抜くべからざるものとなれり。然れども、その下に立ちて、一種の潛勢力を有し、比較的清新の趣味を懷き、一代の文藝を保有し、發達せしめたるものは、主として

僧侶、隱者の失墜

平民なり。敢へて平民と云ふ。當時は、公卿も、また學術に腐心し、武士も、武藝鍛錬の暇を、講學に費したるを以て、文質の彬々たる、前代の比にあらずといへども、眞に、新時代の要求に應じて、新文學を起し、一代の思潮を支配せるものは、平民にあらずして他にあらず。前代、及び前々代に於ける勢力者は、武士たりき。然れども、其及ぶところ、單に、政治上のみにして、文學の霸權を握りしものは、僧侶なりき、隱者なりき。武士は、たゞ、それらの人々に由つて、描寫せらるゝ當面の人物に過ぎず、それらの人々の抱ける教義と、思想とを披瀝するに用ゐられたる傀儡に過ぎず。その描寫の中心となりし一點に於いて、文學的勢力ありと云ふこと能はざるべし。然るに、此の時に到りて、儒道の勢力の發展すると共に、佛法は萎靡して振はず、異教排斥の一方、便として重用せらるゝ結果、單に、形式的流行をなせるに留ま

れり。故に、僧侶と隠者とは、この時代の當初に於いて、多少の活躍をなせるのみ。その後には、到りては、全く、當面の人物ともなること能はず。

これに反して、平民の勢力は、漸次に發展し、世の太平なると共に、財政上に於いて、著しき餘裕を生じ、武士も、またその補助によること多きを致せり。この餘裕は、引いて文藝趣味の興起を促し、その翫賞と、戲作との用に供せる演劇や、俳諧や、狂歌や、川柳や、猶前代の武士の謠曲や、狂言や、連歌に於けるが如し。この故に、作者の雄なるものは、主として平民より出で、而して、その描寫するところは、主として平民社會にあり。勿論、平民社會以外に於いて、多くの武士社會の描出あり。又公卿社會の活寫ありといへども、その表面は、武士たり、時に、公卿たりといへども、たゞ、その體を借り、境を借りしに過ぎず。名は武士、或

平民の發展

は公卿にして、その實は、平民のみ、平民的思想を抱き、平民的行動をなせる武士なり、公卿なり。或は少なくとも、平民的に偏せる武士なり、公卿なり。故に、全體を總稱して、平民的文學と云ふ、未だ甚だしく、その不當なるを見ざるなり。

然れども、翻つて考ふるに、當時の文學は、何人も云ふが如く、各種、各様の體裁を具備せり。古文學の體を擬して、殆んど、それと識別し難き者あり。全然現代に執着して、現世相を描寫する以外、何物をも顧みざるものあり。時に、過去と、現代との諸體を湊合して、渾融の妙を極むるものあり。千種萬態、その窮極を知らざるが如し。然れども、これを類別すれば、自づから擬古の文學、すなはち舊文學と、現代の文學、すなはち新文學との二つに歸す。此二様の潮流は、鎌倉幕府時代の初期に於いて、既に云へるところの如し。しかも、この時代に於い

舊文學と新文學と

て、この兩者の種類の多様なるのみならず、擬古的なるものは、その目標を高くして、上古にまで及びて、殆んど骨髓に入り、現代的なるものは、一層現實に肉薄して、その思想、感情よりして、言語、動作の末端まで描寫し盡くさむとす。故に、此の兩者の含める範圍の廣くして、兩極端の遠きこと、この時代の如きはあらず。恰も、從來の國文學を、時間的關係より分離して、これを一時代に蒐集したるが如し。然り而して、その擬古的なるものは、主として上流に行はれたるを以て、自づから貴族文學を成し、その現代的なるものは、下流に専なるを以て、自づから平民文學を作れり。この兩種の文學に於いて、前者も、猶當時の色彩を帶び、思想に制せられて、純然たる古文學となること能はずといへども、その理想とするところは、過去に在つて現在に在らず。故に、これらのもの一切を擧げて、過去の各時代に隸屬せしめ、當代より

貴族文學
平民文學

平民道

しては、これを排除すとも可なり。而して、その残るところのもの、すなはち現代的のものを、眞の當代の文學として見ること、猶鎌倉幕府時代以後の新文學の如くすること、また決して、不當とは云ふべからず。かくの如くすれば、當代の文學は、全然平民文學にして、しかも、時代は、依然として平民の時代と云ふべきなり。公卿の文學、僧侶隱者の文學は、こゝに全く、平民の手に落ちたるなり。更に、これら新舊の兩文學に就きて觀察するに、この兩者は、自づから、この時代に於ける新舊兩思想の貫流を示せり。而して、その舊なるものは、一部分は公卿道にして、多くの部分は武士道なり。その新なるものは、これに反して、全然平民道、或は町人道なり。公卿道は感情を主とす。武士道は意志を主とす。平民道は、また感情を主とすといへども、美の希求を主とせず、多くの利害の觀念を含めるに於い